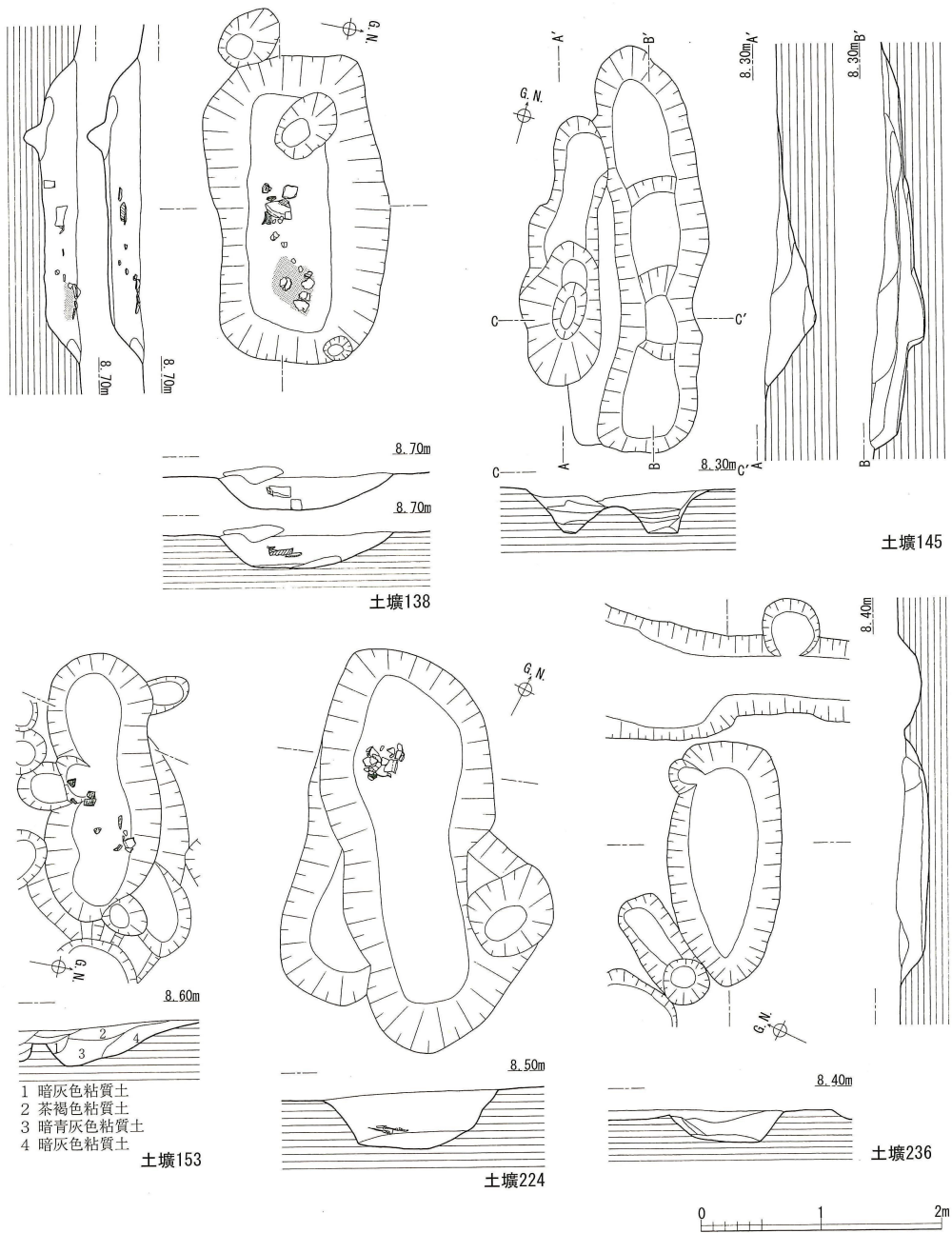
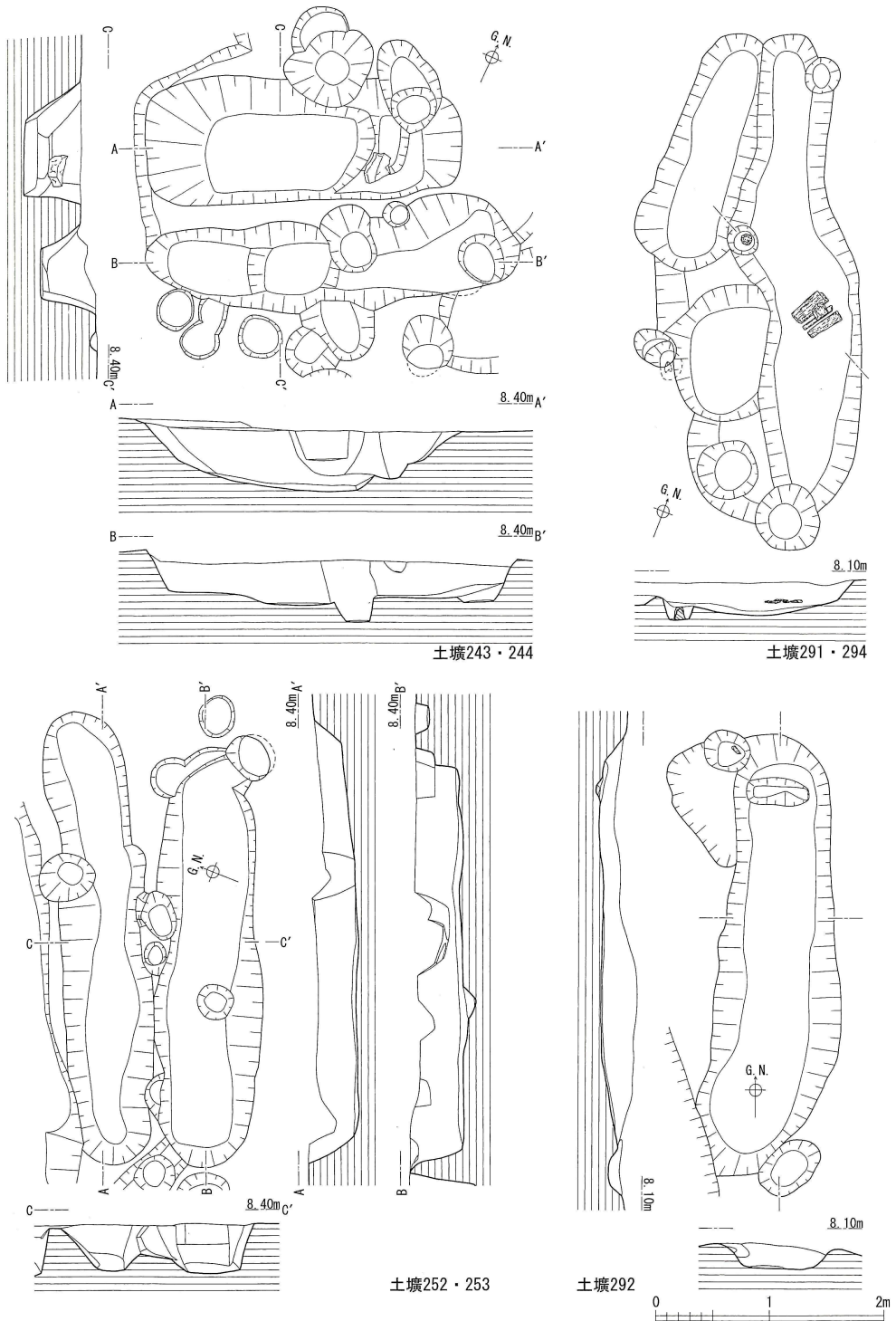
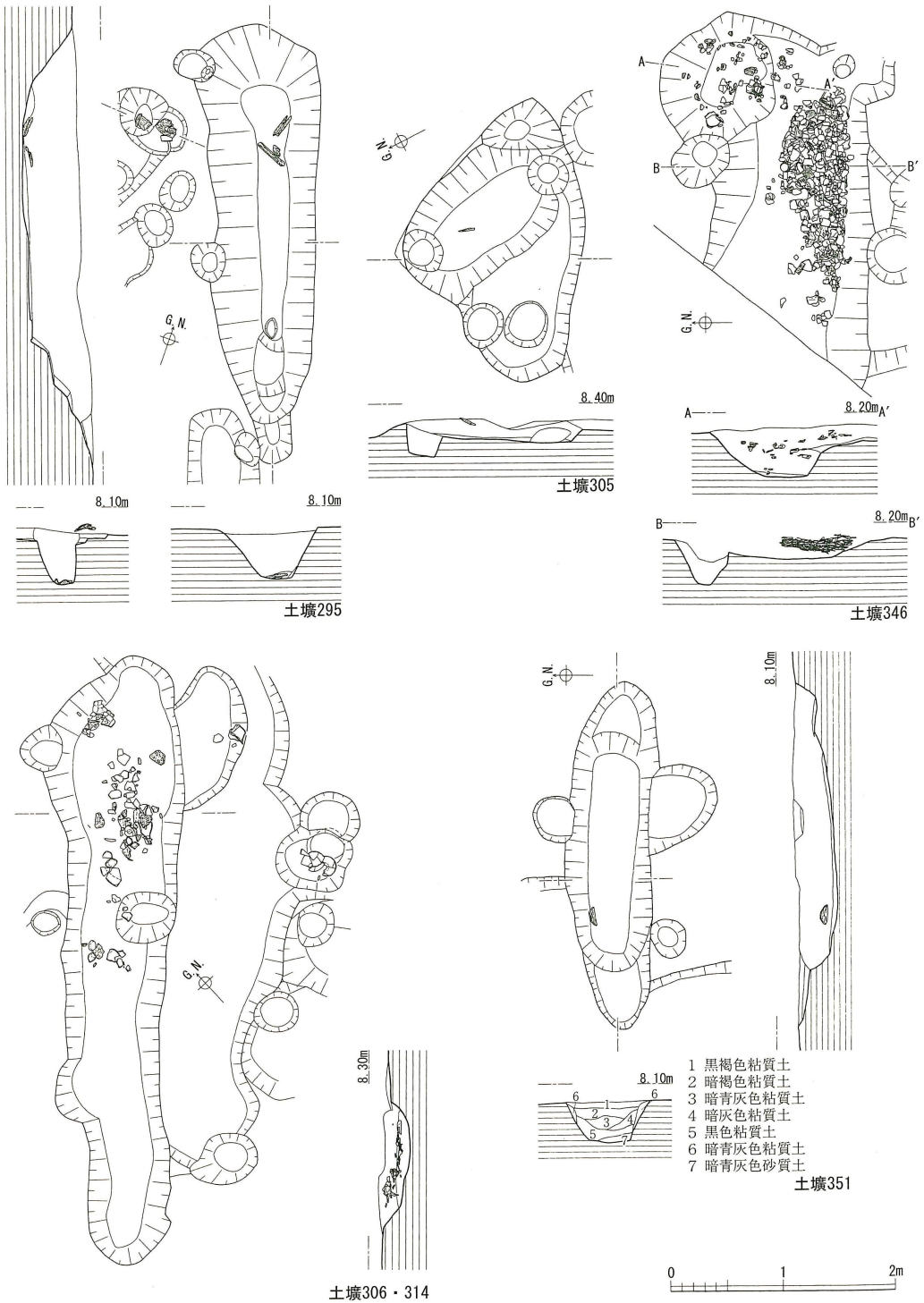




第 38 図 土壙 138・145・153・224・236 実測図 (縮尺 1/60)



第39図 土壙 243・244・252・253・291・292・294 実測図 (縮尺 1/60)



第 40 図 土壌 295・305・306・314・346・351 実測図

第2節 遺構各説

第3表 吉河遺跡土壙観察表

番号	位置	挿図番号	図版番号	平面形	長辺	短辺	深さ	時期	備考
1	8 F・G			不整楕円形	4	2.6	0.3	中期	土器
4	20 E	第35図		不整楕円形	2.5	1.3	0.5	不明	土壙墓
5	12 F	第35図		不整円形	2.3	1.9	0.4	中期	土器
6	11・12 F	第35図		不整楕円形	1.7	0.9	0.4	中期	土壙墓 炭化した栗の実
9	11・12 G			不整楕円形	2.6	2.1		中期	土器
12	11・12 F	第35図		不整円形	1.5	1.2	0.4	中期	土器
13	11 F・G			不整楕円形	1.2	0.8	0.3	中期	土器
14	11 F	第35図		不整円形	1.6	1.4	0.2	不明	土器
18	12 F	第35図		隅丸長方形	3.1	1.8	0.8	中期	土壙墓 骨片・土器・石鏃
19	11 F	第35図		不整楕円形	2.2	1.9	0.4	中期	土器
20	11 F	第35図		不整楕円形	1.4	1.2	0.4	中期	土器
23	13 H	第36図	図版第23	不整円形	2.8	2	0.4	後期	土器
26	11 H			隅丸長方形	1.7	1.2		中期	土器
28	11 G			不整楕円形	2.1	1.4		中期	土器
29	11 F			不定形	1.3	1	0.4	中期	住居2 中央土壙 土器
32	3・4 J			不定形	6.4	4.1		後期	土器
39	3・4 L			不定形	5.1	2.1		後期	土器
40	3・4 L			不定形	8.2	3.6		後期	土器
44	5 J			不整楕円形	1.1	0.7	0.3	不明	土器
49	5・6 K			不定形	2.6	1.7		後期	土器
56	7 I			円形	1.7	1.6		後期	土器
65	12 F			不整円形	1.9	1.6	0.1	中期	土器
70	12 E			不定形	2.3	0.9	0.1	中期	土器
76	11・12 D	第36図	図版第19	隅丸長方形	4.9	2.6	1.3	後期	土壙墓 土器・軽石・石鏃
77	11 D			楕円形	1.9	1		中期	土器
79	11 E			不定形	3.9	1.6		中期	土器
80	11 E	第36図	図版第19	隅丸長方形	2.3	0.7	0.3	不明	土壙墓 半截土器(枕)
81	11 E	第36図	図版第20	隅丸長方形	2.5	0.7	0.2	不明	土壙墓
82	11 E			隅丸三角形	1.3	0.6		中期	土器
85	12 D			不整楕円形	2	1.7		後期	土器
86	11 F	第37図		不定形	5	1.7	0.5	中期	土壙墓 土器
88	10 E	第37図	図版第20	隅丸長方形	2.6	0.8	0.2	中期	土壙墓
92	11 F	第37図		不整楕円形	3.1	2	0.3	中期	土壙墓 粘土塊・土器・砥石
94	11 F			不整円形	1.2	1	0.3	中期	土器
97	10 G			円形	1.1	0.9		後期	土器
99	10 E			楕円形	1.4	1.3		中期	住居2内 土器
100	10 E・F			不整楕円形	1.6	1.5		中期	土器
104	10 G			不整楕円形	2.3	0.8	0.7	中期	土器
113	9 I			不整円形	0.8	0.7		中期	土器
116	9 I			不整円形	0.6	0.5		中期	土器
128	11 G	第37図	図版第22	楕円形	2.2	1	0.3	中期	土壙墓
138	10 G	第38図	図版第21	隅丸長方形	2.5	1.4	0.3	中期	土壙墓 土器・石包丁・砥石
140	10 H			楕円形	1	0.9	0.3	中期	一括土器(2層)
141	10 E			楕円形	1.9	1.1		中期	土器
145	9 F	第38図		隅丸長方形	3.4	0.8	0.4	中期	土壙墓 土器
146	9 F			楕円形	1.7	1	0.4	中期	土器
149	8 F			楕円形	0.8	0.7		後期	土器
151								後期	土器
153	10 F	第38図	図版第24	不整楕円形	2.1	0.9	0.3	中期	鶏形土製品・土器
154	10 F			不整円形	0.9	0.9	0.2	後期	土器
155	9 E・F			楕円形	1.8	1.2	0.4	後期	土器
158	10 F			不定形	2.5	1.8		中期	土器
160	10 G			楕円形	5.2	2.4	0.3	後期	土器
168	11 G	第37図	図版第22	隅丸長方形	2.7	0.7	0.2	不明	土壙墓
180	8 G			不定形	1.5	1.1		中期	土器
190	9 F			楕円形	0.9	0.7		中期	土器
192	8 F・G			楕円形	1	0.8		中期	土器
198	7 F			不定形	2.5	1		中期	土器
203	7 G			楕円形	1.7	1.4	0.5	中期	土器・石鏃
204	7・8 G			不定形	2	0.8	0.6	中期	土器・石包丁・2次加工のある剥片・砥石
206	8 G			不整楕円形	1.5	1.1	0.3	中期	土器・タタキ石・石包丁
208	7 F・G			不定形	2.3	0.9		中期	住居5 土器
211	8・9 H			楕円形	1.7	1.2		中期	土器・石斧
212	8・9 G			楕円形	1.3	1.1		後期	土器
224	11 D	第38図	図版第24	不整楕円形	2.4	1.6	0.5	中期	土壙墓 土器・石包丁・砥石・碧玉製紡錘車
226	11 D			隅丸方形	2.7	1.8	3.8	中期	土器
233	11 D			不整楕円形	1.8	1.2		中期	土器
236	11 D	第38図	図版第22	不整楕円形	2	0.9	0.3	不明	土壙墓
240	9・10 E			隅丸方形	1.4	1.4		中期	土器
243	9 E	第39図	図版第24	不整楕円形	3.3	0.8	0.5	不明	土壙墓 石鏃
244	9 E	第39図	図版第24	隅丸長方形	2.8	1.1	0.5	中期	土壙墓 土器

第3章 遺 構

番号	位置	挿図番号	図版番号	平面形	長辺	短辺	深さ	時期	備考
245	9 E			楕円形	1.5	1	0.3	中期	土器
246	9 D			不整楕円形	1.3	0.6		中期	土器
249	8 E			楕円形	3.9	1.4	0.5	中期	土器・石鋸・円盤・2次加工のある剥片
250	9 E			不整楕円形	1.9	1.4	0.5	中期	土器
252	8 E	第39図		不整楕円形	3.6	0.9	0.4	不明	土壌墓
253	8 E	第39図		不整楕円形	3.9	0.8	0.4	不明	土壌墓
256	8 F			不定形	3	2.1		中期	土器
257	8 D			不定形	1.6	1		中期	土器
258	8 D			不整半円形	1.2	0.4		中期	土器
259	8 D			半円形	1.3	0.5		中期	土器
260	9 D			不定形	1.9	1.4	0.3	中期	土器
262	9 D			不定形	2	1.9		中期	土器
265	8 E			楕円形	1.4	0.9	0.4	中期	溝73内 土器
266	8 E			不定形	1.2	0.4		不明	土器
267	7・8 F			不定形	2.6	1.2		中期	土器
275	8 E			楕円形	1.3	1	0.3	中期	土器
276	7・8 F			不整楕円形	2.3	1.2		中期	土器
277	7 E			楕円形	0.9	0.7		不明	土器
279	7 F			不整楕円形	1	0.8		中期	土器
280	7 F			不定形	1.5	0.7		不明	土器
285	7 E			不定形	1.9	1.6		中期	土器
290	7 E			不定形	1.6	0.7	0.5	中期	土器・砥石
291	7 E	第39図	図版第26	不整楕円形	4.2	1	0.3	中・後期	板材・土器・砥石・2次加工のある剥片・石剣・石鏃・扁平片刃石斧
292	6・7 E	第39図		不整楕円形	4.5	1	0.4	中期	土壌墓 土器・2次加工のある剥片・碧玉片・砥石・小型方柱状片刃石斧
293	7 E			不整楕円形	2.2	1	0.4	中期	板材・土器
294	7 E	第39図	図版第26	楕円形	2.1	0.7	0.2	後期	土壌墓 土器・石包丁・砥石・石鏃
295	6・7 E	第40図	図版第25	不整楕円形	3.5	1	0.5	中期	土壌墓 木片・土器・磨製石斧片・砥石・2次加工のある剥片・石鏃・碧玉
296	8 E			不整楕円形	1.9	1.3	0.3	中期	土器
297	6 E・F			不定形	3.7	1	0.2	中期	土器
298	5・6 F				2.7	2		中期	住居6内（中央西） 土器・石包丁
299	5・6 F			楕円形	1.8	1.5	0.4	中期	住居6内（中央） 土器
305	4・5 F	第40図	図版第27	不整楕円形	1.6	1	0.2	中期	土器・砥石・磨製石剣
306	4 F	第40図	図版第28	不整楕円形	6.2	0.9	0.3	中期	土器・石鋸・磨石・砥石・2次加工のある剥片・石鏃
307	4 F			楕円形	4	1.2		中期	土器
308	4 F・G			楕円形	4.2	1	0.5	中期	土器
310	4 G			楕円形	1.5	1		中期	土器
312	4 G			楕円形	5	2	0.3	中期	土器
314	4 F・G	第40図	図版第28	不整楕円形	4.2	1.3	0.3	中期	土器・石鏃・石鋸
315	4 F			不定形	1.4	1		中期	土器・砥石
316	4 G			楕円形	4	1.6	0.2	中期	土器
317	4 G			不定形	1.9	1		中期	土器
318	3・4 G			不整円形	2.5	2.5		中期	土器
319	3 G			円形	1.3	1.2		中期	土器
320	3 H			楕円形	5.5	1.1	0.2	中期	土器
328	5 E			半楕円形	1.3	0.3		中期	土器
331	5 G			楕円形	1.2	0.6	0.2	中期	土器
332	5 G			楕円形	1.5	1.1	0.3	不明	土器
333	6 F			不整楕円形	1.4	0.7		不明	土器
336	5・6 E			不定形	2.6	1.5		中・後期	土器
338	6 E			楕円形	5.6	1.5		中期	土器
339	6 E			不整楕円形	2.6	0.8		中期	土器
340	6 F			楕円形	1.5	1.4		不明	土器
342	6 F			不定形	10.3	2.5		中期	土器
343	4 G			楕円形	2.9	0.9		不明	土器
345	3 G			不定形	1	0.8		中期	土器
346	3 F・G	第40図		不整楕円形	3	2	0.6	中期	土器・碧玉
347	3 G			楕円形	2	0.9	0.4	中期	土器・フレーク
348	3 G			円形	1.5	1.1	0.3	不明	土器・石鋸
349	3 H			楕円形	1.5	1		不明	土器
350	3 H			楕円形	1.6	1.2		不明	土器
351	3 G・H	第40図	図版第21	楕円形	3	0.7	0.4	不明	土壌墓 円盤状木製品・土器
352	7 D・E			不整形	3	0.9		不明	土器
353	4 F			不定形	2.5	1.3		不明	土器
354	4 G			楕円形	1.7	1.2		不明	土器
355	4 G			楕円形	1.5	0.9		不明	土器
356	1 I			不定形	3.9	2.5		不明	土器
357								不明	土器
358								不明	土器
359								不明	土器

(表中の単位はすべてm)

4 溝

溝には、旧河道に相当する自然流路と人工の流路がある。前者は9条、後者は102条を数える。自然流路は、主に集落の東端をなす流路（溝11・16）と集落の西端をなす流路（同3・106）とに分けられる。前者は、墓域や住居域に東接して北流し、北部で急に幅が狭まり、弧を描いて西に湾曲する1条の流路である。途中、数条のより小さな流路（溝18・34など）が合流する。なおここでは、便宜上溝11、同16の2者に分けて記す。一方後者は、墓域に西接して西流する幅の狭い溝3と、北流する幅の広い溝106からなるが、合流部分が今回の調査対象地の外に広がるため、両者が全く同一の流路か否かは不明である。これらの流路のうち、溝11は、中期には存在していたことが判明している。人工の流路は、主に住居域に分布する。幅の広狭、深さの深浅などに違いが認められるが、大半の溝は、他の遺構と重複したり削平を受けるなどして全形をとどめず、残された部分での形状把握にとどまる。以下、主要な溝について記す。

溝11（図版第29、第13図） 調査区域の南東部（19H・I区）から、墓域や住居域に東接して北流し、溝16へと続く。幅約5～11m、深さ約0.3～0.4mを測り、長さ約130mを検出した。主要な出土遺物には、土器のほか打製石鏃・石包丁・太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・砥石などの石器類があり、多数を数える。特に、当溝の下流に当たる5～7G・H区では、中期に属する土器が、集中して出土している。

溝16（図版第29～34、第41図） 住居域の北東端部を、4H区から1H区にかけて弧を描いて西流する。幅約1.8m～6.4m、深さ約0.2～0.4mを測り、長さ約40mを検出した。主要な出土遺物には、土器のほか磨製石剣・石包丁・砥石などの石器類、管玉・碧玉・石鋸などの玉作関連遺物、銅鏃、木製品などがあり、多数を数える。特に、木製品は900点を数え、当遺跡出土木製品の大部分を占める。木製品は、溝の湾曲部分（2～4H・I区）に集中して出土している。これらの木製品の中には、蓋・槽・鏃なども含まれる。出土遺物は、大部分が後期であり、溝11とは様相が異なる。

溝3（第13図） 墓域の南部に西接して20D・E区から西流し、18B区付近で溝106に合流する。幅約4～7m、深さ約0.1～0.4mを測り、長さ約30mを検出した。当溝からの出土遺物は、極めて少ない。

溝106（図版第35、第13図） 溝3と合流後墓域に西接し、ゆるやかな弧を描いて北流する。幅約10～13m、深さ約0.3～0.4mを測り、長さ約40mを検出した。出土遺物は、打製石鏃、太型蛤刃石斧、砥石、碧玉などがあり、若干数を数える。

以下、その他の主要な溝について記す。

溝5（第21図） 住居・墓混在域の東部（11・12G・H区）にあつて、竪穴住居1の北西部に位置し、東部は竪穴住居4と、南部は方形周溝墓12と重複する。幅約0.8～2.0m、深さ約0.1～0.25mを測り、長さ約7mを検出した。出土遺物には後期に属する土器があり、東部から中央部にかけて出土した。位置と形状から、竪穴住居1の外周溝の可能性がある。

溝7（第20図） 住居・墓混在域の中央（12F区）に位置する。幅約0.7～1m、深さ約0.1m、長さ約2.5mを測る。出土遺物には、中期に属する土器がある。

溝9（第21図） 住居・墓混在域の東部（11G区）にあって、竪穴住居4に西接する。幅約1.3m、深さ約0.2mを測り、長さ約2mを検出した。出土遺物には、中期に属する土器がある。

溝14（第19・20図） 墓域の北部（12・13C～F区）にあって、方形周溝墓7の南部を通り、東から西に流れる。幅約0.5～2.2m、深さ約0.1～0.2mを測り、長さ約30mを検出した。出土遺物には、中期と後期に属する土器が混在し、太型蛤刃石斧や打製石鏃がある。

溝17（第20図） 住居・墓混在域の中央（10・11E・F区）に位置する。幅約1～2m、深さ約0.1m、長さ約4.5mを測る。出土遺物には中期に属する土器があり、東部において一括廃棄された状態で出土した。

溝26（第13図） 墓域の北西部（13・14D・E区）にあって、北流する。方形周溝墓14の台状部西端において検出した。幅約1.3m、深さ約0.5m、長さ約5.5mを測る。出土遺物には中期に属する土器があり、中央部において出土した。

溝32（第13図） 溝11の東方、調査区中央の東縁部を北流する自然流路である。10J区から8K区までの間、約24mを検出した。幅約1.5～4m、深さ約0.1mを測る。出土遺物には中期に属する土器や磨製石鏃などがあり、土器は南部において集中して出土した。

溝36（図版第35、第18図） 住居域の中央部（8F区）に位置する。幅約1m、深さ約0.5m、長さ約5.5mを測る。出土遺物には中期に属する土器があり、まとまった状態で出土した。

溝45（第18図） 住居域の南東部（9G区）に位置する。幅約0.7～1.3m、深さ約0.2～0.3m、長さ約5mを測る。出土遺物には、中期に属する土器がある。

溝47（第18図） 住居域の東部（8F・G区）にあって、竪穴住居5の南部と重複する東西方向の溝である。幅約2m、深さ約0.2～0.3m、長さ約4.5mを測る。出土遺物には中期後葉に属する土器や、石鏃などがある。

溝63（第17図） 住居域の南部（9E区）に位置する。幅約0.7m、深さ約0.1m、長さ約6mを測る。出土遺物には、中期後葉に属する土器がある。

溝87（第15・17図） 住居域の中央部（7E区）にあって、北西から北に向けゆるやかな弧を描いて北流する。幅約0.9m、深さ約0.1～0.2m、長さ約6mを測る。出土遺物には、中期に属する土器がある。

溝89（第15図） 住居域の中央部（7E区）にあって、溝87から分岐して北流する。北西側が調査区外に広がるため、全容は不明である。最小幅約0.7m、深さ約0.1m、長さ約5mを検出した。出土遺物には、中期前葉に属する土器がある。

5 墓道

墓道は6条を検出しえた。ただ、より正確に表現すれば、この墓道は隣接して造営された方形

1

2

3

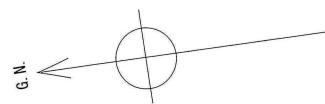
4

5

I

H

G



第41図 溝16遺物出土状況図（縮尺 1/100）

周溝墓の溝の掘削によって掘り残された部分であり、いわば無遺構地区をそれと想定復原したものに過ぎない。しかし、その北端が住居・墓混在域南辺の中央部に達しており、他の東・西・南端が、なんらかの幅を保ちながら各方形周溝墓外周溝の中間部か、あるいは方形周溝墓の台状部を経て、群端のいずれかの方形周溝墓の陸橋部へと接続する形をなしているのが自然であろう。

さてこの墓道は、墓域の中央部を南北に貫き長大な「幹道」と、それから分岐して群端の方形周溝墓に接続するより幅の狭い「枝道」とに分かれる。前者は1条、後者は5条を数える。

幹道（図版第36、第13図） 住居・墓混在域南辺の中央部と墓域南辺の中央部とを結ぶ形で、あるいは別な表現をすれば方形周溝墓群を東西に2分する形で、南北に直線的に延びる道である。遺跡南端部に未発掘地区が残るので全容は確言しがたいが、方形周溝墓7北溝の北縁に東接する箇所と同23南溝の南縁に西接する箇所とを、かりに基点として計測すれば、その部分の長さのみで約74mを測る。幅は、起点ともいえる北端部が最も広く約9m、一方中間部が最も狭く約1.4mを測る。これをより詳しく説明すれば、道幅は、北端部から方形周溝墓9と同2の中間部まで、南進するにつれ狭くなっており、最も狭い箇所ではその幅は約3.3mを測る。ところが、方形周溝墓5と同2の中間部から方形周溝墓20と同23の中間部までにかけては、顕著な広狭の差を見ないでほぼ同様な道幅を保って続いており、その幅は約1.4mから2m強を測る。

この幹道は、南の基点からさらにどの方向に延びるか、いまひとつ明確ではない。ただ両基点間の向きや遺跡周辺部の地形から推して、そのまま南方に延びて方形周溝墓24と同25との中間部を通過している可能性が高いことが指摘できる。ちなみに、方形周溝墓24と同25の中間部の幅は約1.7mであって、これが先に述べた両基点間南部の平均的な道幅に合致するのは、そうした想定を補強する。

なお、この幹道は、陸橋部を介して9基の方形周溝墓（西縁で北より順に方形周溝墓7・14・9・18・20、東縁でやはり北より順に方形周溝墓6・3・1・10）に接しており、またその一部は陸橋部と重複しているが、その他9基の方形周溝墓に至る5条の枝道（西縁で北より順に枝道A・B・C、東縁でやはり北より順に枝道D・E）に接している。いずれにしろ、道の形は、それぞれの方形周溝墓が構築された結果として、現出したものに過ぎない。

枝道A（第13図） 幹道北部の西縁から分岐して方形周溝墓13に至る枝道である。方形周溝墓14東溝の東縁に南接する箇所と、方形周溝墓13の北東陸橋部の東端とをそれぞれ基点として計測すれば、全長約10mを測る。幅は約0.5～0.8mを測る。

枝道B（図版第36、第13図） やはり幹道北部の西縁から分岐し、以下順に方形周溝墓15・8・17・18・21に至る枝道である。方形周溝墓9東溝の東縁に南接する箇所と、方形周溝墓21の北東陸橋部の末端とをそれぞれ基点として計測すれば、その全長は約23mを測る。幅は約0.4～0.9mを測る。この枝道は、方形周溝墓9南溝と同5北溝との中間部を通過して、まず方形周溝墓15の北東陸橋部に至る。そうしてその陸橋部を渡って、同方形周溝墓の台状部東辺に沿って南進すれば、

方形周溝墓 8 の北西陸橋部に外接する。さらに南進して、方形周溝墓 15 の南東陸橋部を渡って外部に出ると、まず方形周溝墓 17 の北東陸橋部に外接し、次にその多少南方で方形周溝墓 18 の北西陸橋部に外接する。さらに、方形周溝墓 17 東溝と方形周溝墓 18 西溝との中間部を南進すると、最後に方形周溝墓 18 の南西陸橋部と、同 21 の北東陸橋部とに外接して終わる。ただし、この終点となるべき箇所は、方形周溝墓 18 を経由する枝道 C との合流点でもある。参考までに、この枝道 B は、方形周溝墓 17・21 に至った箇所ですれぞれ終わるのではなく、両方形周溝墓とも副次的な南西陸橋部を設けているので、分岐した 2 条が両方形周溝墓の南西外方に続いている可能性が残る。

枝道 C (第 13 図) 幹道中央部の西縁から分岐して方形周溝墓 21 に至る枝道である。幹道と方形周溝墓 18 南東陸橋部の接点と、方形周溝墓 21 の北東陸橋部の末端とをそれぞれ基点として計測すれば、その全長は約 8 m を測る。幅は約 0.5 ～ 0.8 m を測る。この枝道は、まず方形周溝墓 18 の南東陸橋部を渡って台状部に至る。次に台状部南辺に沿って西進して、南西陸橋部を渡って外部に出ると、枝道 B に合流するとともに方形周溝墓 21 の北東陸橋部に外接して終わる。上述の枝道 B の記述の繰り返しになるが、さらに続いて同方形周溝墓の南西外方に延びる可能性が残る。なお、この枝道 C (あるいは枝道 B) の復原に抵触することであるが、方形周溝墓 18 の台状部を斜めに横切り、北西陸橋部を渡って北西外方に出た後、方形周溝墓 17 の北東陸橋部などに至る、という復原も不可能なわけではない。ちなみに、後述する枝道 D の存在は、こうした逆行する形の例が必ずしもありえないことではない、ことを示す好例にほかなるまい。そこで、これを枝道 C' と仮定しておきたい。

枝道 D (図版第 36、第 13 図) 幹道北部の東縁から分岐して方形周溝墓 6・12 に至る枝道である。幹道と方形周溝墓 6 の南西陸橋部の接点と、方形周溝墓 12 のやはり南西陸橋部の南西端とをそれぞれ基点として計測すれば、その全長は 8 m 余りを測る。幅は約 1.2 m を測る。この枝道は、方形周溝墓 6 の南西陸橋部を渡って台状部に至り、次にこの台状部を斜めに横切って方形周溝墓 12 の南西陸橋部に外接して終わる。

枝道 E (第 13 図) 幹道南端から分岐して方形周溝墓 23・22 などに至る枝道である。方形周溝墓 23 西溝の西縁に南接する箇所と、方形周溝墓 22 の南東陸橋部の南東端とをそれぞれの基点として計測すれば、その全長は約 20 m を測る。この枝道は、幹道南端から東折し、方形周溝墓 23 南溝に外接する形で東進して、同方形周溝墓の南東陸橋部に至る。そうしてその陸橋部を渡り、台状部東辺に沿ってさらに北進すると、北東陸橋部を経て次に方形周溝墓 22 の南東陸橋部に外接して終わる。さらに、住居域からみるとあまりにも遠回りになる感があつて、不自然な感じを消しがたいが、方形周溝墓 22・11・10・2 の各東溝や同 4 南溝と、溝 11 との中間部には、細長い道状の余地が続いているので、この枝道 E はさらに北方に延びており、北進あるいは東折して方形周溝墓 4 の南東陸橋部に至って終わる可能性を指摘しうる。そうであるとすれば、枝道 E の全長は約 56 m を、幅は約 0.4 ～ 2.8 m を測ることになる。方形周溝墓 2 の南東部に陸橋部状の痕跡が存在することも、こうした推定を補強する。

6 方形周溝墓

方形周溝墓は、墓域の北端部のみを除いてその大部分に分布し、25基を数える。これらは墓道の幹道を挟んで、主に東群（10基）と西群（14基）に分かれる。さらに、枝道の介在、方形周溝墓の分布状態、方形周溝墓の規模の違いなどによって、4～5単位に分けうる。

方形周溝墓の規模には、一辺が約4.4mを測る小型の例から、一辺が約12.5mを測る大型の例までがある。形態では、四周に溝を巡らす例（7基）と、陸橋を残す例（17基）があり、後者の例では、方形周溝墓ごとに陸橋部の数が1～3箇所と多様である。

埋葬施設には、台状部の墓壙と溝内の壺棺とがある。このうち墓壙は、4基（方形周溝墓3・9・13・14）で、各1基ずつ検出した。また、壺棺は、方形周溝墓10の東溝と同20の西溝から、それぞれ1個を検出した。

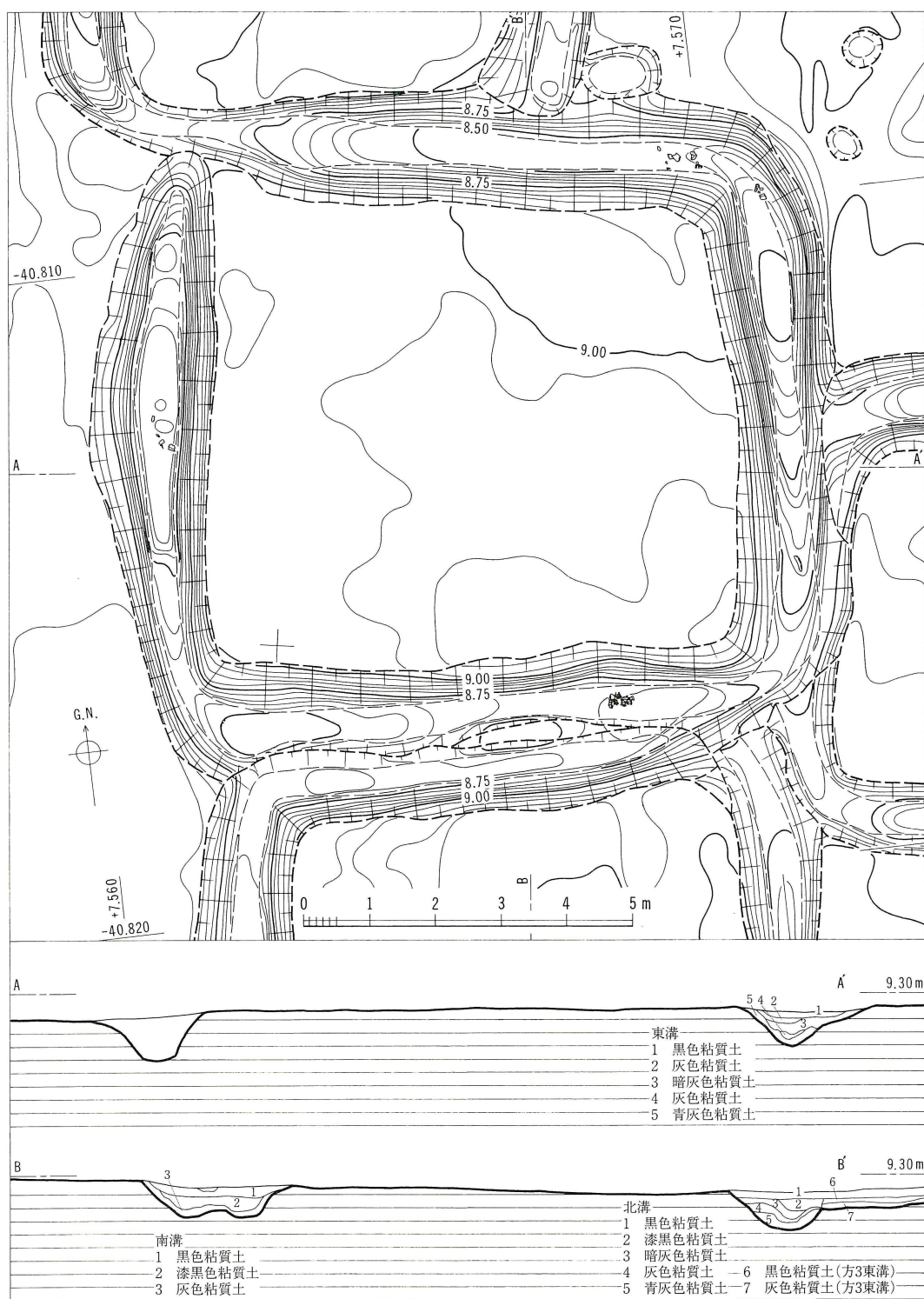
方形周溝墓1（図版第37、第42図） 墓域北部（14・15F・G区）にあって、幹道に東接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約9.2m、南北長約8.3mを測る。台状部外周の溝は、四周を連続して巡る。ただし、北辺をなす北溝は、方形周溝墓3の南溝でもあって同西溝に連続するが、方形周溝墓1の北西隅で狭く且つ浅くなり、また西溝の北端は接合部の境界をなす稜線を有しており、この部分が陸橋部となる。北辺をなす北溝は、上端の長さ約8m余り、同幅約1.7m、深さ約0.6mを、東辺をなす東溝は、上端の長さ8.9m余り、同幅約1.7m、深さ約0.6mを、南辺をなす南溝は、上端の長さ9.5m余り、同幅約2.3m、深さ約0.5mを、西辺をなす西溝は、上端の長さ9m余り、同幅約1.8m、深さ約0.7mをそれぞれ測る。なお、東溝の南部は、方形周溝墓4の西溝と重複し、南溝は、方形周溝墓2の北溝と底部を異にして重複する。北西隅の陸橋部は、上端の幅約0.5mで、周溝で区画された内・外両部分より多少低く、幹道からそのまま周溝内部の台状部に続く。

遺物は、南溝の東部から1個、西溝や周溝の北東部から4個の供献土器が出土した。

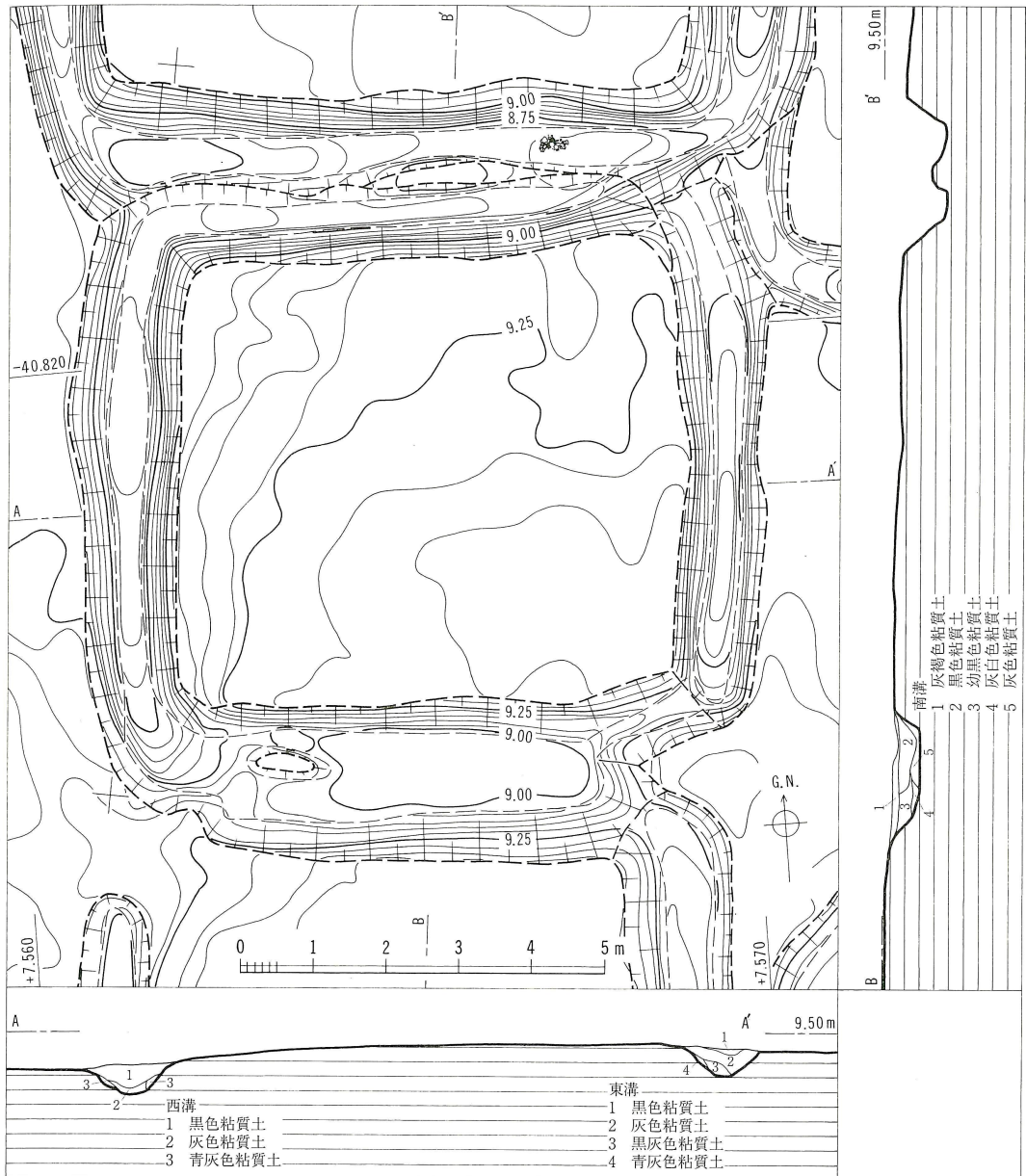
方形周溝墓2（図版第38、第43図） 墓域中部（15F・G区）にあって、幹道に東接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約7.8m、南北長約7.1mを測る。台状部外周の溝は、四周を連続して巡る。ただし、北東・南東両隅には、溝の接合部の境界をなす稜線を有し、深さ20cm足らずと浅くなる。北辺をなす北溝は、上端の長さ8.5m余り、同幅約2.2m、深さ約0.6mを、東辺をなす東溝は、上端の長さ7.5m余り、同幅約1.2m、深さ約0.45mを、南辺をなす南溝は、上端の長さ8m余り、幅約2.2m、深さ約0.4mを、西辺をなす西溝は、上端の長さ8m余り、幅約1.5m、深さ約0.5mを、それぞれ測る。

なお、北溝は方形周溝墓1の南溝と、南溝は方形周溝墓10の北溝と重複する。また、南西隅の浅い部分は、陸橋の可能性がある。ちなみに、上端の幅は約0.7mを測る。

方形周溝墓3（図版第38・39、第44・45図） 墓域北部（13・14F・G区）にあって、幹道に東接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約6.5m、南北長約8mを測る。台状部外周の溝は、北西隅にのみ陸橋部を残して巡る。ただし、北東・南東の両隅にも、溝の接合

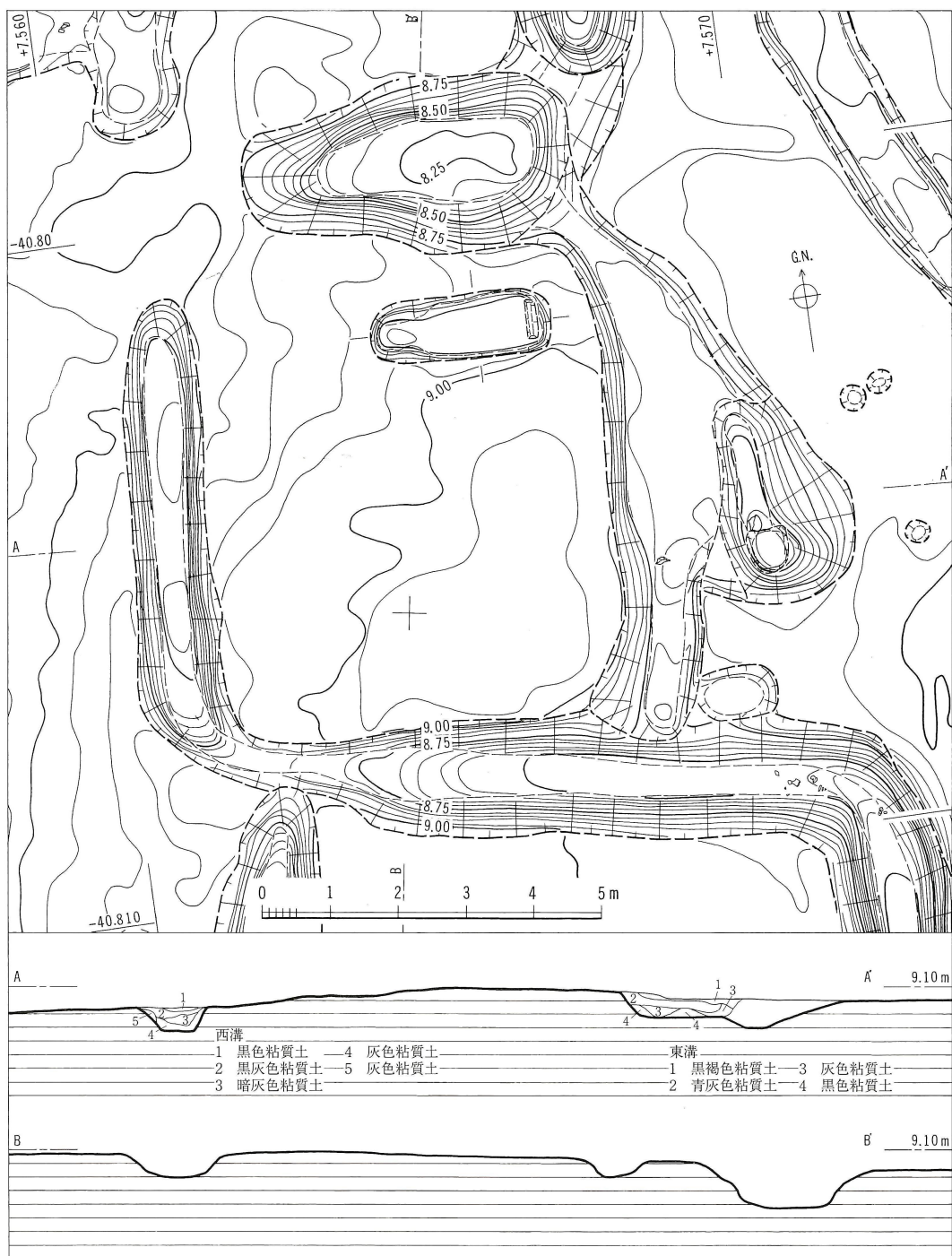


第 42 図 方形周溝墓 1 実測図 (縮尺 1/100)



第43図 方形周溝墓2実測図(縮尺1/100)

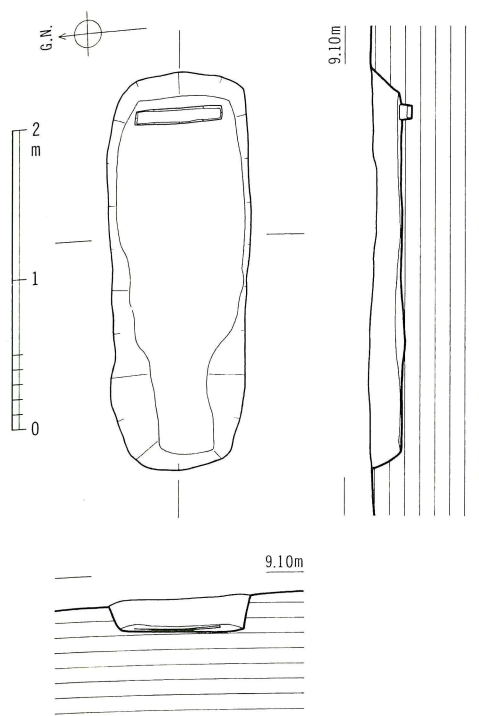
部の境界をなす稜線を有する。北辺をなす北溝は、上端の長さ約4.8m、同幅約2.6m、深さ約0.7mを、東辺をなす東溝は、上端の長さ8m余り、同幅約1.6m、深さ約0.4mを、それぞれ測る。また南・西両辺をなす南・西両溝は、連続してL字形をなし、上端の南北長6.8m余り、同東西長7m余り、深さ約0.6mを測る。もともと、北溝は方形周溝墓6の南溝でもあり、また南溝は方形周溝墓1の北溝でもある。北西隅の陸橋部は、上端の幅約1.7mで、周溝で区画された内・外両部



第44図 方形周溝墓3実測図 (縮尺 1/100)

分とも高さが変わらず、幹道からそのまま周溝内部の台状部に続く。

なお、東溝の中央部に東接して南北に長い不整楕円形の土壇1基(土壇3)が存在するが、位



第45図 方形周溝墓3埋葬施設実測図
(縮尺 1/50)

置や形状からみて、土墳墓である可能性が残る。

方形周溝墓3の埋葬施設としては、台状部の北東部に位置する土墳1基を検出した。この土墳は、平面形が東西に長い隅丸長方形で、縦・横断面形とも逆台形をなす。規模は、上端の長さ2.64 m、同幅0.94 m、深さ0.24 m、下端の長さ2.37 m、同幅0.88 mを測る。土墳は、東部が西部より多少幅が広く、かつ土墳底面もわずかに高い。土墳底面の末端部には、長軸と直交する形で、南北に細長い長方形の一段と深くなった箇所が存在する。その規模は、南北長57cm(下端長55cm)、幅10cm(同8cm) 深さ6cmを測る。以上の諸特徴からみて、本土墳は被葬者を東枕で埋葬した組合木棺を納めた墓であって、末端部の細長い掘り込みは、木棺の小口板を埋設するためのものであろうと思える。なお、被葬者の頭位を算出すれば、E-2°-Sになる。土墳内の遺物は、墓壇西部上端の埋土から出土した、小型管玉1個が存在するのみである。

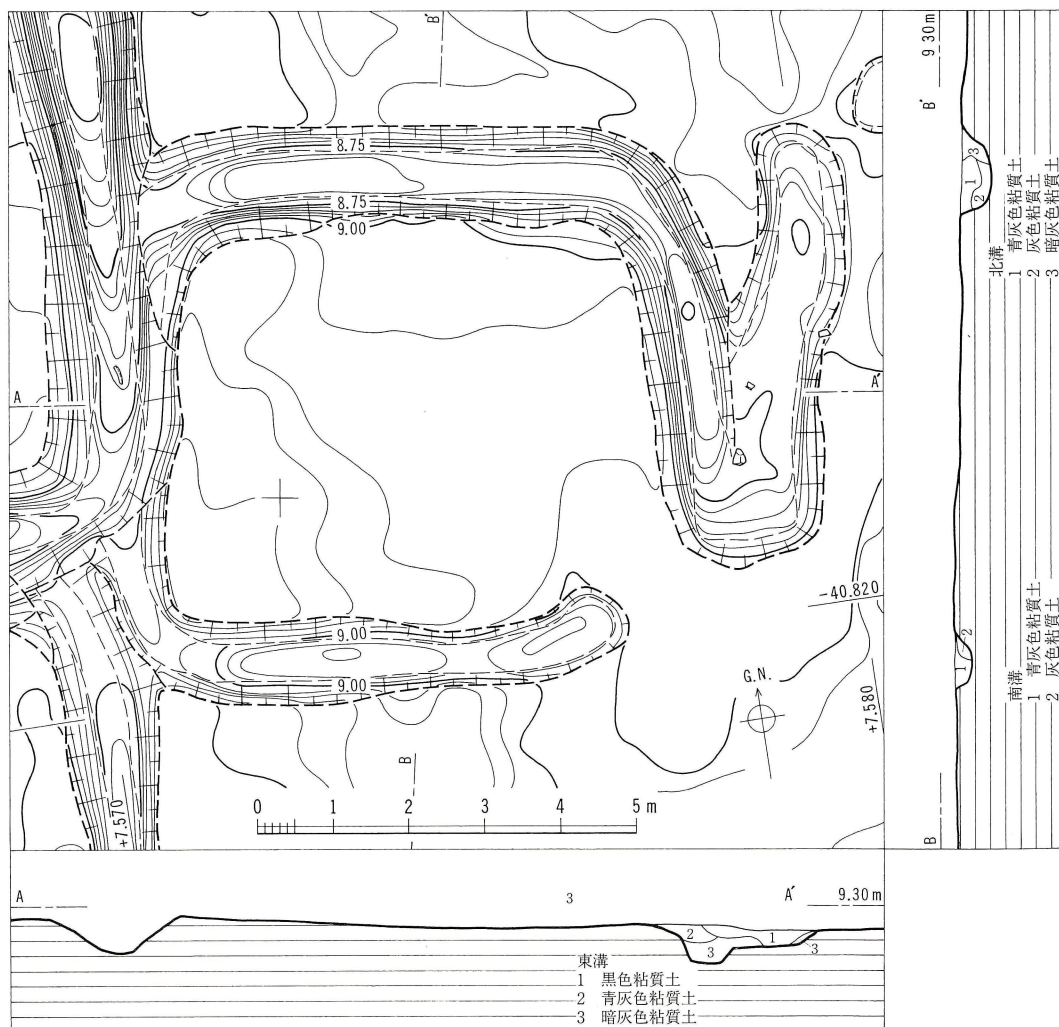
本土墳は、台状部上でも北寄りに偏在しているの

で、そのほかにも若干の埋葬施設が、かつて存在していたものと推定せざるをえない。

方形周溝墓4 (図版第40、第46図) 墓域中央部(14・15G・H区)にあって、方形周溝墓1および同2に東接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約7.4 m、南北長約6.0 mを測る。台状部外周の溝は、南東隅にのみ陸橋部を残して巡る。北辺をなす北溝は、上端の長さ7 m余り、同幅約1.2 m、深さ約0.4 mを、東辺をなす東溝は、上端の長さ5 m余り、同幅約1.2 m、深さ約0.5 mを、南辺をなす南溝は、上端の長さ6.2 m余り、幅約1.1 m、深さ約0.3 mを、西辺をなす西溝は、上端の長さ6.5 m余り、幅約1.7 m、深さ約0.5 mを、それぞれ測る。なお、東溝は溝13と、西溝は方形周溝墓1および同2の東溝と重複する。南東隅の陸橋部は、上端の幅約1.1 mで、周溝で区画された内・外両部分とも高さが変わらず、枝道Eからそのまま周溝内部の台状部に続く。

主な遺物は、東溝の南部から、1個の供献土器が出土している。

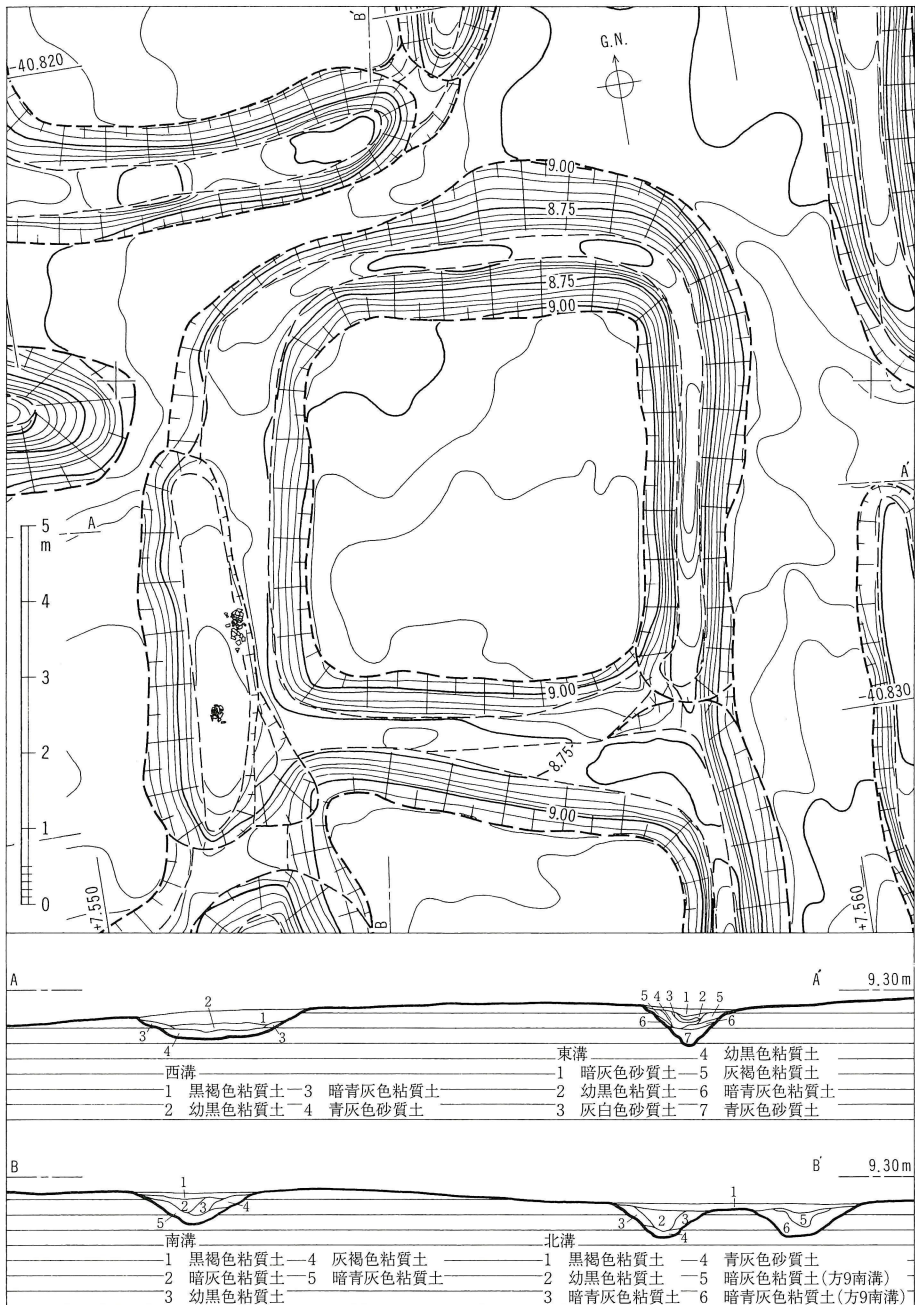
方形周溝墓5 (図版第40、第47図) 墓域中央部(15・16 F区)にあって、幹道に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約5.5 m、南北長約6.0 mを測る。台状部外周の溝は、四周を連続して巡る。ただし、南東の隅では、溝の接合部の境界をなす稜線を有する。北辺をなす北溝は、上端の長さ6 m余り、同幅約2.0 m、深さ約0.5 mを、東辺をなす東溝は、上



第46図 方形周溝墓4実測図（縮尺1/100）

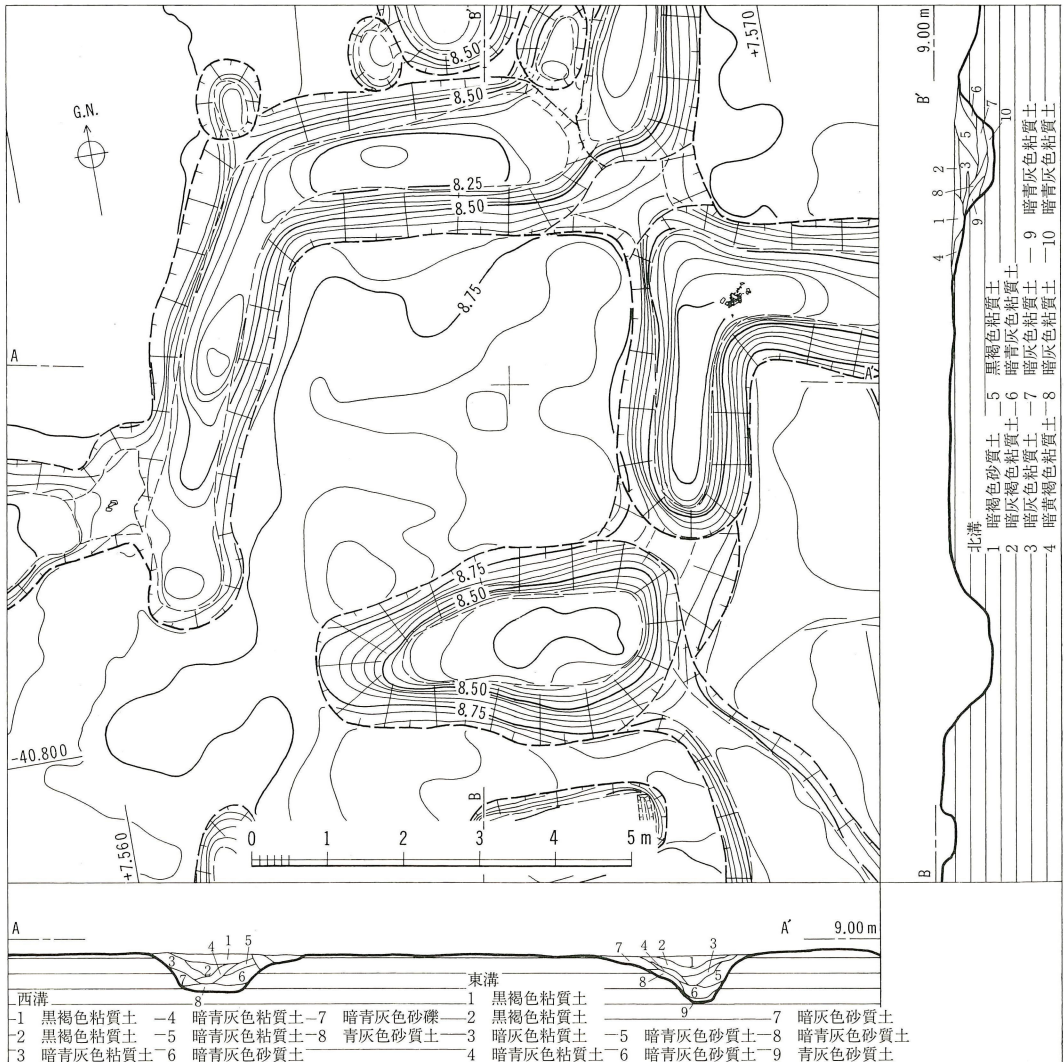
端の長さ6.5 m余り、同幅約1.3 m、深さ約0.5 mを、南辺をなす南溝は、上端の長さ7 m余り、幅約2.0 m、深さ約0.4 mを、西辺をなす西溝は、上端の長さ6.5 m余り、幅約1.9 m、深さ約0.3 mを測る。なお、南溝は方形周溝墓8の北溝と、西溝は同15の東溝と重複する。

方形周溝墓6（図版第41、第48図） 墓域北部（12・13F・G区）にあって、幹道に東接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西・南北長とも約5.4 mを測る。台状部外周の溝は、南西・北東・南東の三方の隅に陸橋部を残して巡る。南辺をなす南溝は、既述のように方形周溝墓3の北溝でもある。再度その規模を記すならば、上端の長さ約4.8 m、同幅約2.6 m、深さ約0.7 mを測る。東辺をなす東溝は、方形周溝墓12の南溝と連続して逆L字形をなす。上端の南北長約4.4 m、同幅約1.7 m、深さ約0.5 mを測る。北・西両辺をなす北・西両溝は連続して逆L字形をなし、上端の東西長5.2 m余り、同南北長6.5 m余り、同幅約2 m、深さ約0.5 mを測る。



第47図 方形周溝墓5実測図(縮尺1/100)

南西隅の陸橋部は、上端の幅約1.2mで、周溝で区画された内・外両部分とも高さが変わらず、幹道からそのまま周溝内部の台状部に続く形をなす。また、北東隅の陸橋部は、上端の幅約0.9mで、周溝で区画された内・外両面より多少低く、方形周溝墓6と同12をつなぐ形をなす。さらに、南東隅の陸橋部は、上端の幅約0.3mで、周溝で区画された内・外両部分より多少低く、外部と台状



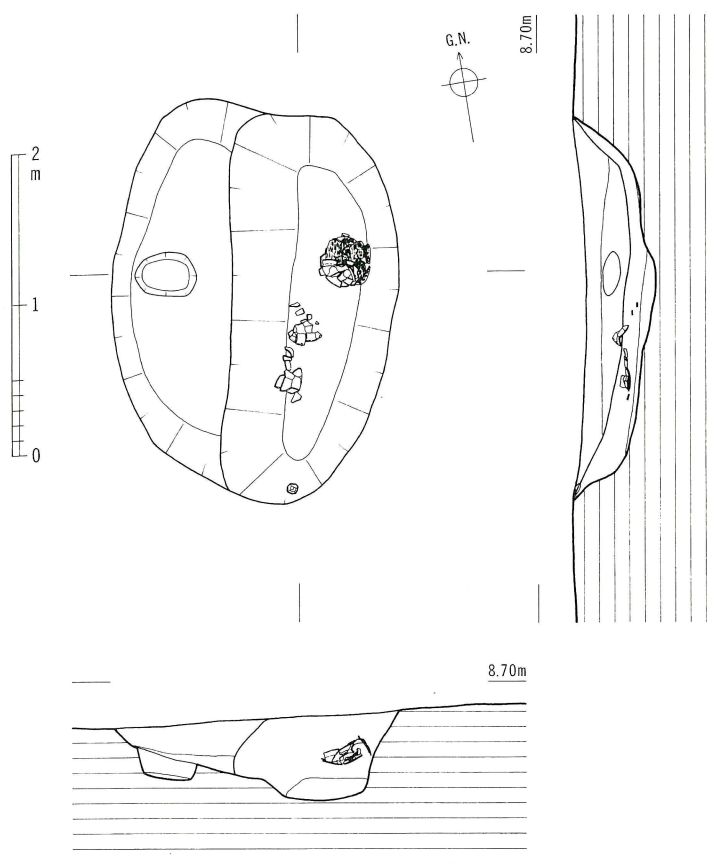
第48図 方形周溝墓6実測図 (縮尺1/100)

部をつなぐ形をなす。

方形周溝墓7 (図版第41・42、第49・50図) 墓域北端部(12・13D・E区)にあって、幹道に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約12.5m、南北長約10.3mを測る。台状部外周の溝は、四周を連続して巡る。ただし、南西隅は、溝の接合部の境界をなす稜線を有する。北辺をなす北溝は、上端の長さ12.5m余り、同幅約2.2m、深さ約0.7mを、東辺をなす東溝は、上端の長さ11m余り、同幅約3.5m、深さ約0.5mを、南辺をなす南溝は、長さ11.5m余り、幅3.3m余り、深さ約0.5mを、西辺をなす西溝は、上端の長さ10.2m、幅約2.6m、深さ約0.4mを測る。なお、南溝は方形周溝14の北溝と重複し、南側の立ち上がりは不明瞭である。北東隅の陸橋部は上端の幅約1.0mで、周溝で区画された内・外部分より低く、外部と台状部をつなぐ形



第49図 方形周溝墓7実測図（縮尺1/100）



第50図 方形周溝墓7実測図(縮尺1/50)

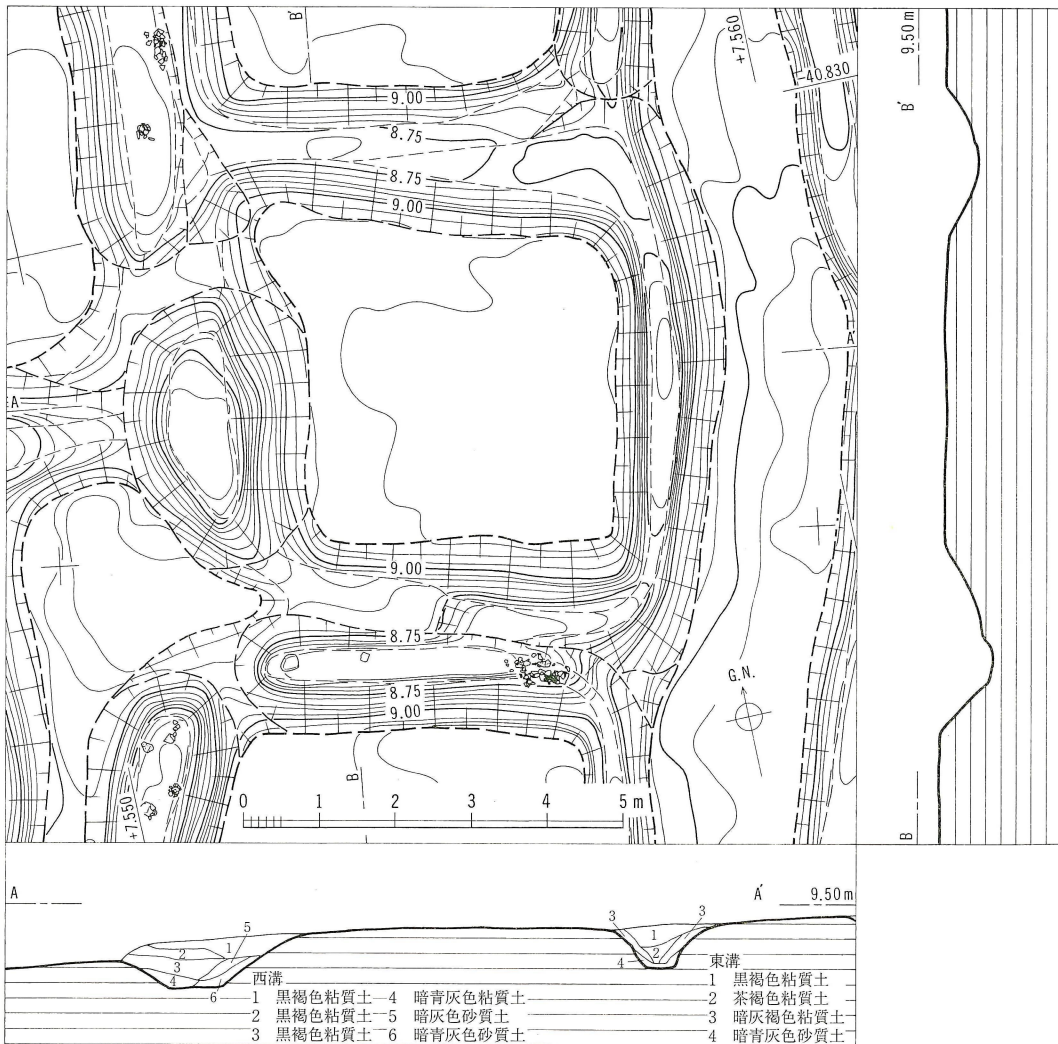
なお、本方形周溝墓の位置する墓域の北端部は、住居・墓混在域であり、台状部において複数の土壌や溝が切り合っている。このため、この埋葬施設が本方形周溝墓に伴うものか否かは、不明確である。

方形周溝墓8 (図版第42、第51図) 墓域中央部(16・17F区)にあって、幹道に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約5.6m、南北長約5.5mを測る。台状部外周の溝は、西辺北部にのみ陸橋部を残して巡る。北辺をなす北溝は、既述のように方形周溝墓5の南溝でもあり、西部は方形周溝墓15の東溝と重複する。再度その規模を記すならば、上端の長さ7m余り、同幅約2.0m、深さ約0.4mを測る。東辺をなす東溝は、北端で方形周溝墓5、南端で方形周溝墓18のそれぞれ東溝と連なり、上端の南北長7.5m余り、同幅約1.5m、深さ約0.6mを測る。南辺をなす南溝は、方形周溝墓18の北溝と溝底を異にして重複し、上端の東西長6m余り、同幅約2.5m、深さ約0.7mを測る。西辺をなす西溝は、上端の南北長約3.7m、同幅約2.5m、深さ約0.7mを測る。西辺北部の陸橋部は、上端の幅約0.6mで、周溝で区画された内・外両面より多少低く、方形周溝墓8と同15をつなぐ形をなす。

をなす。

遺物は、台状部の北部から1個、外周溝から5個の供献土器のほか、北溝を主に多数の土器が出土した。

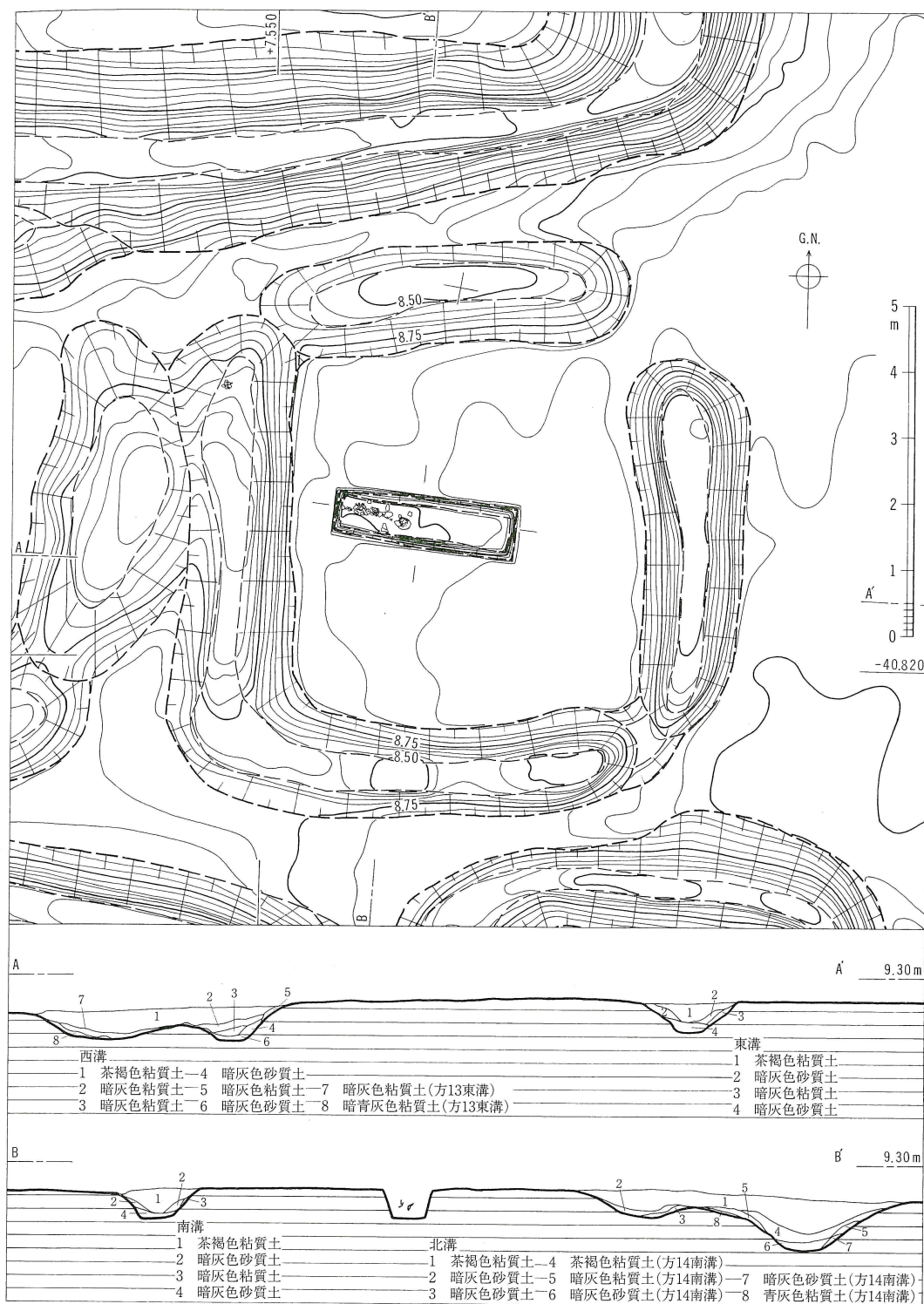
方形周溝墓7における埋葬施設としては、台状部の北西部に位置する土壌1基(土壌64)を検出した。この土壌は、平面形が南北に長い楕円形で、西側は一段浅い土壌と切り合う。縦・横断面形は、ほぼ逆台形をなすが、縦断面は、中央部で緩やかにくぼむ。規模は、上端の長さ2.57m、同幅1.9m、深さ0.56m、下端の長さ1.94m、同幅0.46mを測る。本埋葬施設においては、墓域内北東部と南西部の埋土中層から、供献土器2点が出土している。



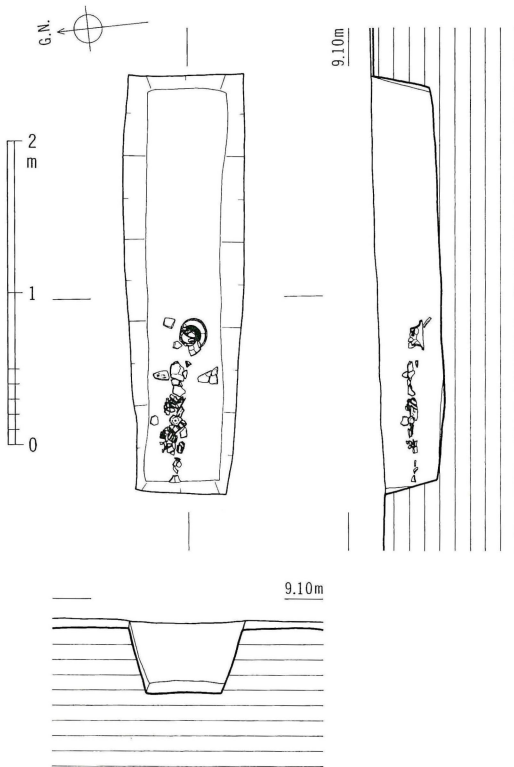
第51図 方形周溝墓8実測図(縮尺1/100)

方形周溝墓9(図版第43、第52・53図) 墓域中央部(15E・F区)に位置し、幹道に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約6.5m、南北長約6.9mを測る。台状部外周の溝は、北東・南東・北西の三方の隅に陸橋部を残して巡る。東辺をなす東溝は、上端の長さ約5.8m・同幅約1.9m・深さ約0.5mを、北辺をなす北溝は、上端の長さ約5.8m、同幅約1.7m、深さ約0.4mを、それぞれ測る。また、西・南両辺をなす西・南両溝は、連続してL字形をなし、東西・南北長とも上端の長さ7m余り、同幅約1.9m、深さ約0.6mを測る。三方の陸橋部にはそれぞれ若干の差が存在する。北東隅の陸橋部は上端の幅約0.8mで、周溝で区画された内・外両部分とも高さが変わらず、幹道と枝道Aの分岐点からそのまま周溝内部の台状部に続く形をなす。次に、南東隅の陸橋部は上端の幅約0.2mとかなり狭く、かつ周溝で区画された内・外両面より多

第2節 遺構各説



第52図 方形周溝墓9実測図(縮尺1/100)



第53図 方形周溝墓9埋葬施設実測図
(縮尺 1/50)

かに高い。形状から、木棺を使用し被葬者を東枕で埋葬したと考えられる。その場合、頭位はE-6°-Sである。埋葬施設からは、墓壇内西部の埋土中層から供献土器が出土した。

方形周溝墓10 (図版第44、第54図) 墓域中央部(15G、16F・G区)にあって、幹道に東接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約7.3m、南北長約7.7mを測る。台状部外周の溝は、北西部にのみ陸橋部を残して巡る。ただし北東隅には、溝の接合部の境界をなす稜線を有する。北辺をなす北溝は、既述のように方形周溝墓2の南溝と重複し、当方形周溝墓に伴う部分に限れば、上端の長さ6.4m余り、同幅約2.2m、深さ約0.5mを測る。東辺をなす東溝は、南端で方形周溝墓11の東溝と連なり、上端の長さ8m余り、同幅約1.3m、深さ約0.4mを測る。南辺をなす南溝は、方形周溝墓11の北溝でもあり、上端の長さ約7.8m、同幅約1.2m、深さ約0.3mを測る。西辺をなす西溝は、南端で方形周溝墓11の西溝と連なり、上端の長さ5.8m余り、同幅約1.0m、深さ約0.4mを測る。北西部の陸橋部は、上端の幅約1.25mで、周溝で区画された内・外两部分とも高さが変わらず、幹道からそのまま周溝内部の台状部に続く形をなす。

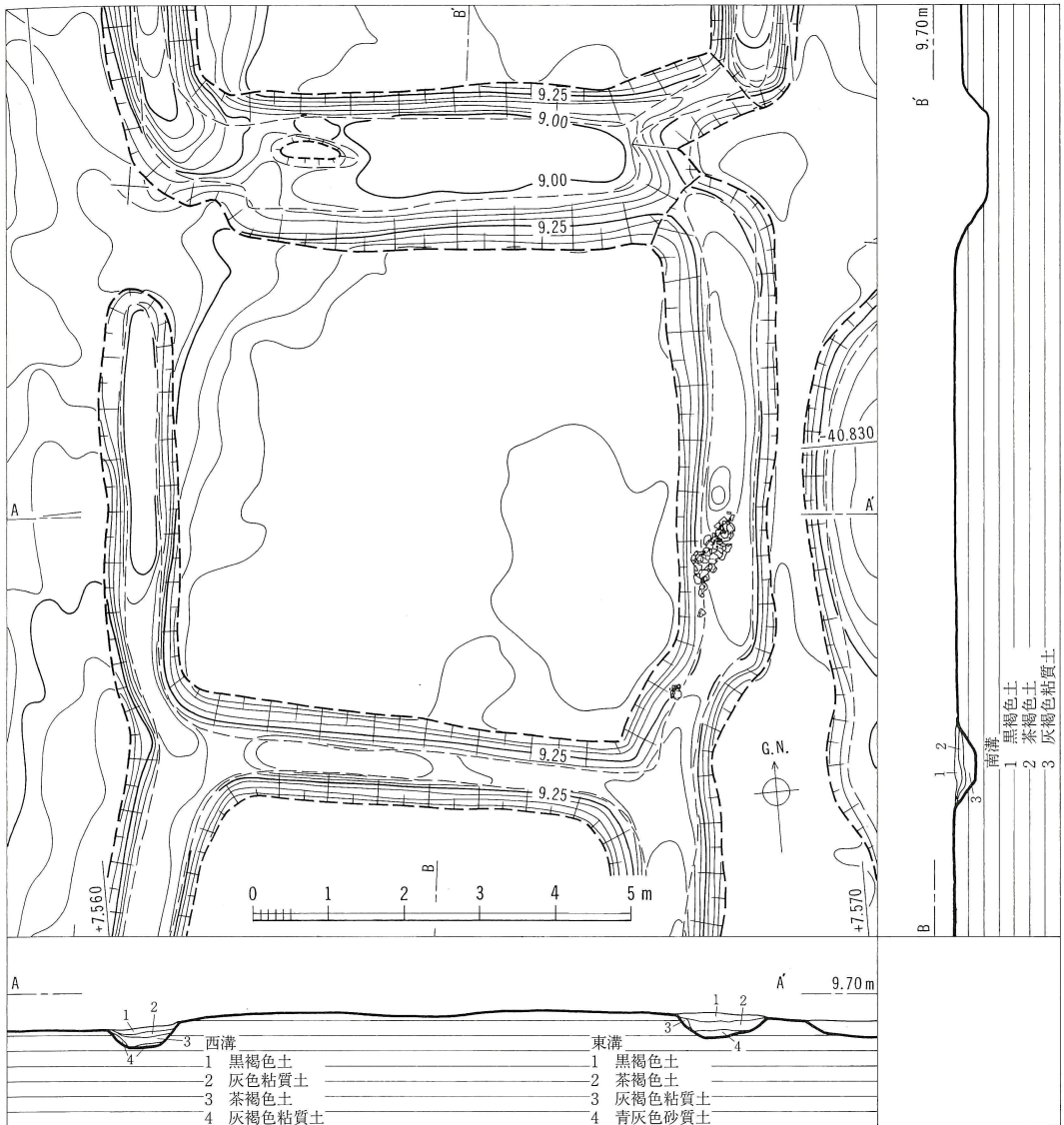
遺物は、東溝の南部から1個の供献土器が出土した。

方形周溝墓10の埋葬施設としては、東溝の中央南部溝底において、壺棺を1基検出した。壺棺は、口縁部が北に、底部が南に位置し、破碎した状態であった。

少低く、幹道と枝道Bの分岐点と台状部とをつなぐ形をなす。また、北西隅の陸橋部は、西・北両溝の接合部の境界の稜線をなす程度のものである。かつ周溝で区画された内・外两部分よりも低く、枝道Aと台状部とをつなぐ形をなす。なお、北東隅の陸橋部が最も住居域寄りに位置している。すなわち、各陸橋部の位置と規模からみて、三方の陸橋部のうち北東隅の陸橋部が最も主たるものであり、南東隅の陸橋部、北西隅の陸橋部は副次的なものといえよう。

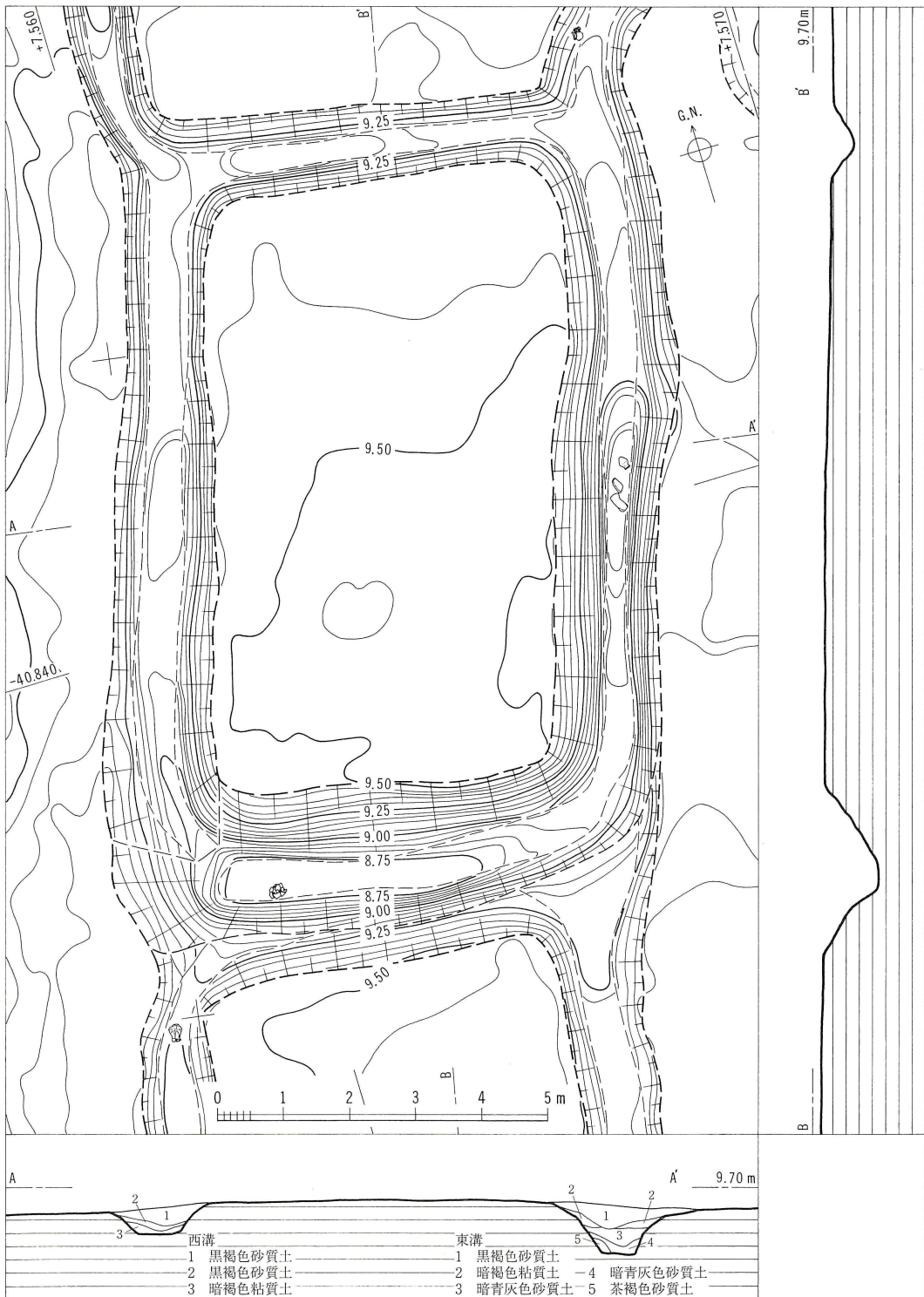
遺物は、西溝の北部から1個の供献土器が出土した。

方形周溝墓9の埋葬施設としては、台状部中央のやや西辺寄りに位置する土壇1基を検出した。この土壇は平面形が東西に長い長方形で、縦・横断面形とも逆台形をなす。規模は、上端の長さ2.75m、同幅0.8m、深さ0.4m、下端の長さ2.6m、同幅0.5mを測る。土壇は、東部が西部より多少幅が広く、かつ土壇底面もわず

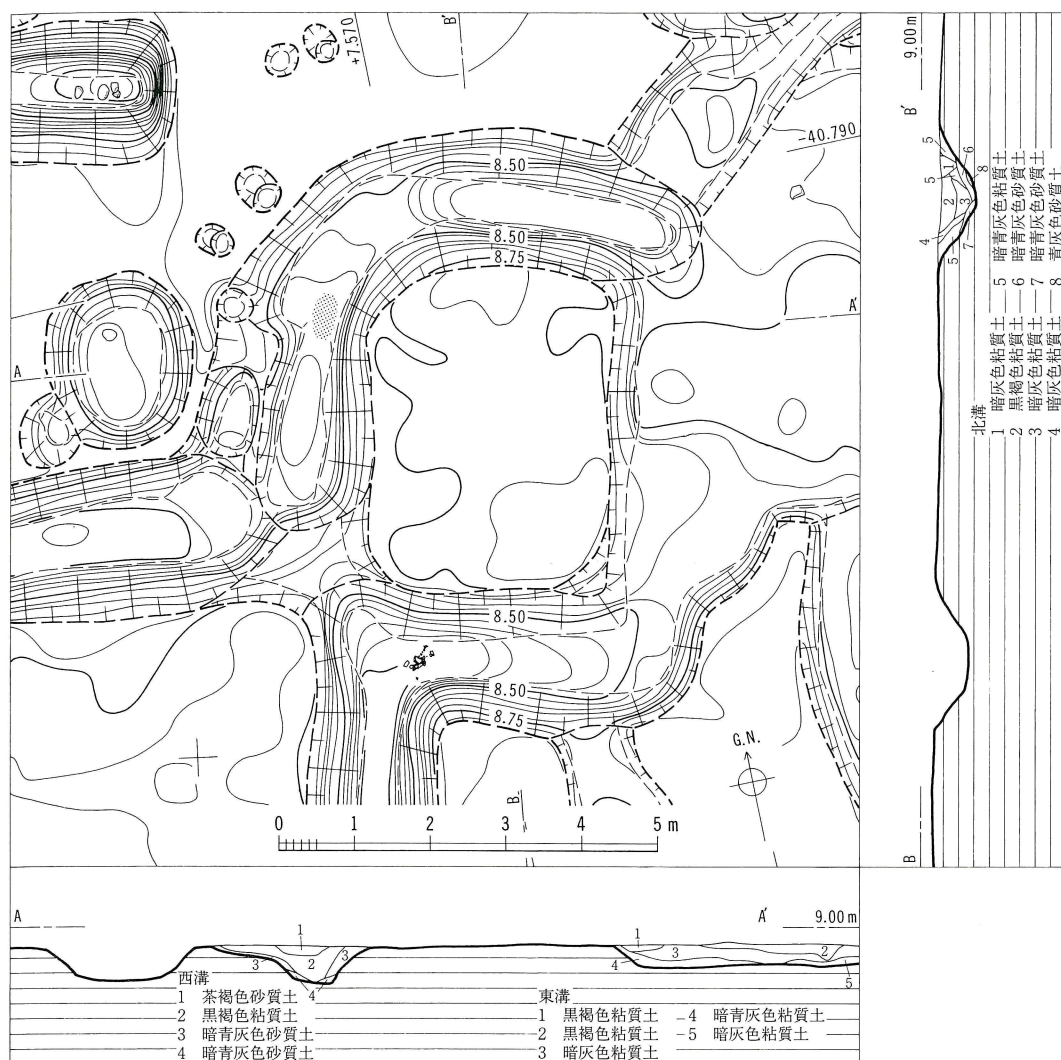


第 54 図 方形周溝墓 10 実測図 (縮尺 1/100)

方形周溝墓 11 (図版第 45、第 55 図) 墓域中央部 (16G、17F・G 区) にあって、幹道に東接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約 6.4 m、南北長約 10.6 m を測る。台状部外周の溝は、四周を連続して巡る。北辺をなす北溝は、既述のように方形周溝墓 10 の南溝でもあり、上端の長さ約 7.8 m、同幅約 1.2 m、深さ約 0.3 m を測る。東辺をなす東溝は、北端で方形周溝墓 10 の東溝と連なる。南端も方形周溝墓 22 の東溝と連なるが、南溝と連続して逆 L 字状に一段深くなる。上端の長さ 11 m 余り、同幅約 1.7 m、深さ約 0.8 m を測る。南辺をなす南溝は、方形周溝墓 22 の北溝と重複し、上端の長さ 8 m 余り、同幅約 2.8 m、深さ約 0.9 m を測る。西辺



第 55 図 方形周溝墓 11 実測図 (縮尺 1/100)



第 56 図 方形周溝墓 12 実測図 (縮尺 1/100)

なす西溝は、上端の長さ 11 m 余り、同幅約 1.5 m、深さ約 0.5 m を測る。

遺物は、東溝の中央部北寄りの位置から2個、南溝の西部から1個の供献土器が出土した。

方形周溝墓 12（図版第 46、第 56 図） 墓域北部（12G 区）にあって、方形周溝墓 6 に北東接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約 3.9 m、南北長約 5.1 m を測る。台状部外周の溝は南西隅にのみ陸橋部を残して巡る。南辺をなす南溝は、方形周溝墓 6 の東溝と接続して逆 L 字形をなし、上端の東西長約 5.2 m、同幅約 2.1 m、深さ約 0.5 m を測る。西辺をなす西溝は、屈曲して逆 L 字形をなし、北辺をなす北溝に連続する。上端の南北長 4.3 m 余り、同東西長 5.1 m 余り、同幅約 1.9 m、深さ約 0.5 m を測る。東辺をなす東溝は、南溝と接続して逆 L 字形をなすが、南部にその一部の形跡をとどめるのみで、竪穴住居 1 との中間部に、一段と深くなっている部分

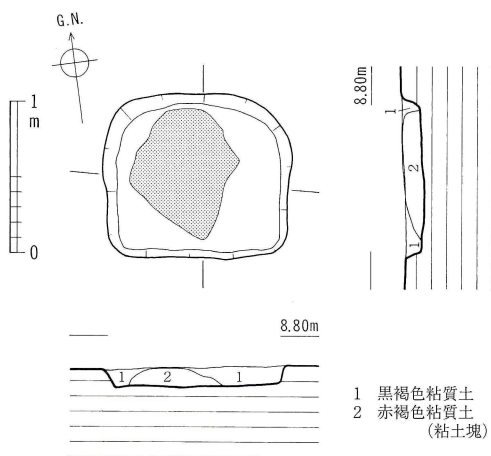
があるため、明確な形をなさない。南西部の陸橋部は、上端の幅約0.9 mで、方形周溝墓6・12の両台状部より多少低くなっているが、双方をつなぐ形をなす。

遺物は、西溝の北部から2個の供献土器が出土したほか、西溝や東溝から5個の土器などが出土した。

方形周溝墓 13 (図版第47、第57・58図) 墓域中央部(15D・E区)にあって、方形周溝墓9に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約9.0 m、南北長約7.5 mを測る。台状部外周の溝は、北東隅の陸橋部を残して巡る。ただし、北西と南東の両隅では、溝の接合部の境界をなす稜線を有する。北辺をなす北溝は、東部で方形周溝墓14の南溝と重複する。上端の長さ7.5 m余り、同幅約1.8 m、深さ約0.5 mを測る。東辺をなす東溝は、東側で方形周溝墓9の西溝と接し、上端の長さ5.5 m余り、同幅約2.4 m、深さ約0.4 mを測る。南辺をなす南溝は、屈曲して逆L字形をなし、西辺をなす西溝に連続する。上端の東西長約11 m、同南北長約9 m、幅約2.5 m、深さ約0.5 mを測る。北東隅の陸橋部は、上端の幅約0.6 mで、周溝で区画された内・外両部分とも高さが変わらず、枝道Aからそのまま周溝内部の台状部に続く形をなす。

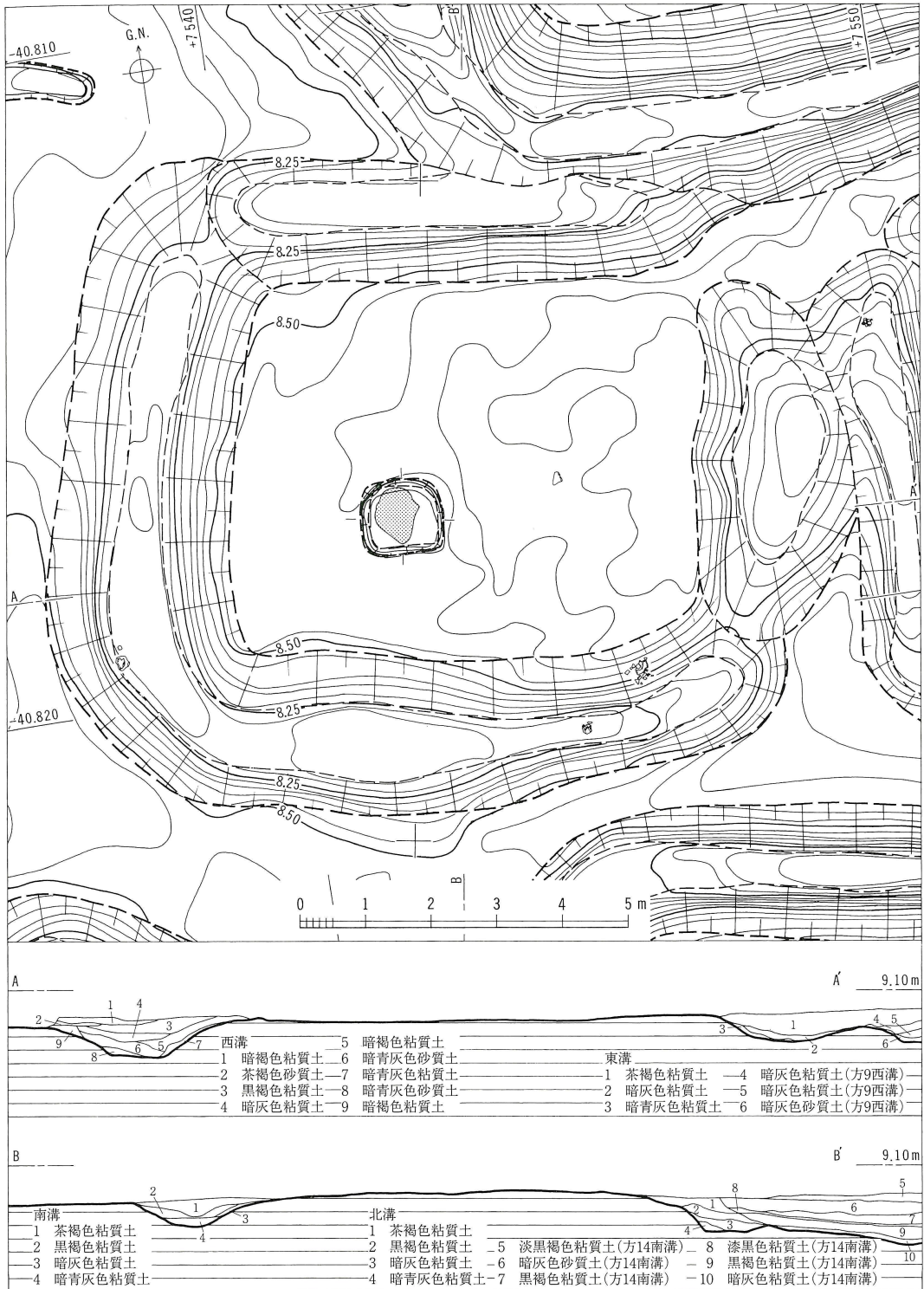
遺物は、台状部から大型石包丁1個、南溝の東部から2個、西溝の南部から1個の供献土器が出土した。

方形周溝墓13の埋葬施設としては、台状部中央のやや西辺寄りに位置する土壌1基を検出した。この土壌は平面形が隅丸方形で、東西・南北の両断面形とも浅い逆台形をなす、小型土壌である。その規模は、上端の東西長約1.2 m、同南北長約1.1 m、深さ0.13 m、下端の東西長約1.1 m、同南北長約0.95 mを測る。土壌内には、東西長0.75 m、南北長約0.8 mの範囲に、一部に炭素粒を含む粘土塊が存在している。また、土壌の北東隅から碧玉片1個が出土している。本土壌は方形周溝墓13の埋葬施設と考えざるをえないが、台状部中央からみて偏在しており、かつ小型であるので、主となる埋葬施設とは考えがたい。すなわち、そのほかにも若干の埋葬施設が存在していたものと推定せざるをえない。

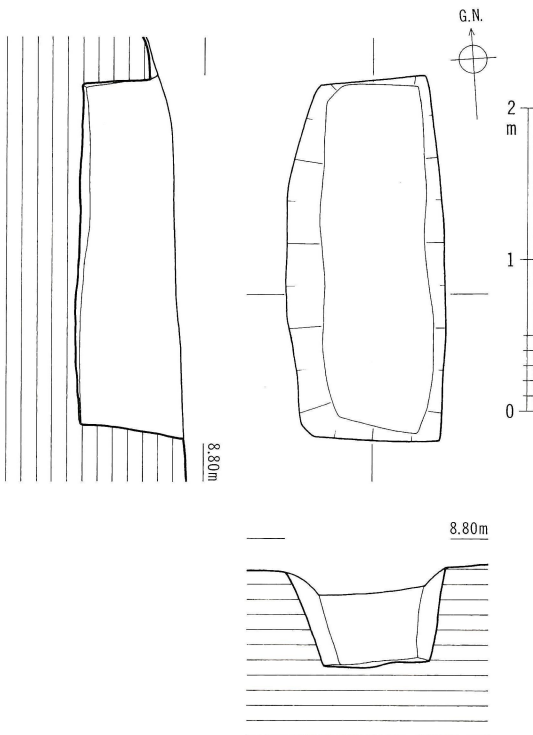


第57図 方形周溝墓13埋葬施設実測図(縮尺1/50)

方形周溝墓 14 (図版第48、第59・60図) 墓域北部(13～15D～F区)にあって、幹道に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約12.5 m、南北長約11.5 mを測る。台状部外周の溝は、北東隅にのみ陸橋部を残して巡る。北辺をなす北溝は、北側で方形周溝墓7の南溝と重複する。上端の長さ約10.5 m、同幅2.2 m余り、深さ約0.7 mを測る。東辺をなす東溝は、上端の長さ約14.5 m、同幅約3.3 m、深さ約0.8 mを測る。南辺をなす南溝の西部と西辺をなす西溝の南端は、方形周溝墓13の北溝と重複する。



第 58 図 方形周溝墓 13 実測図 (縮尺 1/100)



第59図 方形周溝墓14埋葬施設実測図
(縮尺 1/50)

方形周溝墓 15 (図版第 49、第 61 図) 墓域中央部 (15・16E・F 区) にあって、方形周溝墓 5・8 に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約 8.5 m、南北長約 7.6 m を測る。台状部外周の溝は、北東隅と東辺南部に陸橋部を残して巡る。東辺をなす東溝は、北側で方形周溝墓 5 の西溝と重複する。上端の長さ約 5.3 m、同幅 1.4 m 余り、深さ約 0.4 m を測る。残る三方の溝は、逆コの字状に連なる。南辺をなす南溝は、方形周溝墓 17 の北溝と重複するが、東端で浅くなり、方形周溝墓 8 の西溝との境界は稜線をなす。上端の長さ 10 m 余り、同幅約 2 m、深さ約 0.6 m を測る。西辺をなす西溝は、南部で方形周溝墓 16 の外周溝東隅部と重複する。上端の長さ 8.5 m 余り、幅約 2.2 m、深さ約 0.6 m を測る。北辺をなす北溝は、西溝から連なり、上端の長さ 8 m 余り、同幅約 2.1 m、深さ約 0.6 m を測る。北東隅の陸橋部は、上端の幅約 0.4 m を測り、周溝で区画された内・外两部分とも高さが変わらず、枝道 B から周溝内部の台状部に続く形をなす。なお、東面南部の陸橋部は、既述のように方形周溝墓 8 の陸橋である。

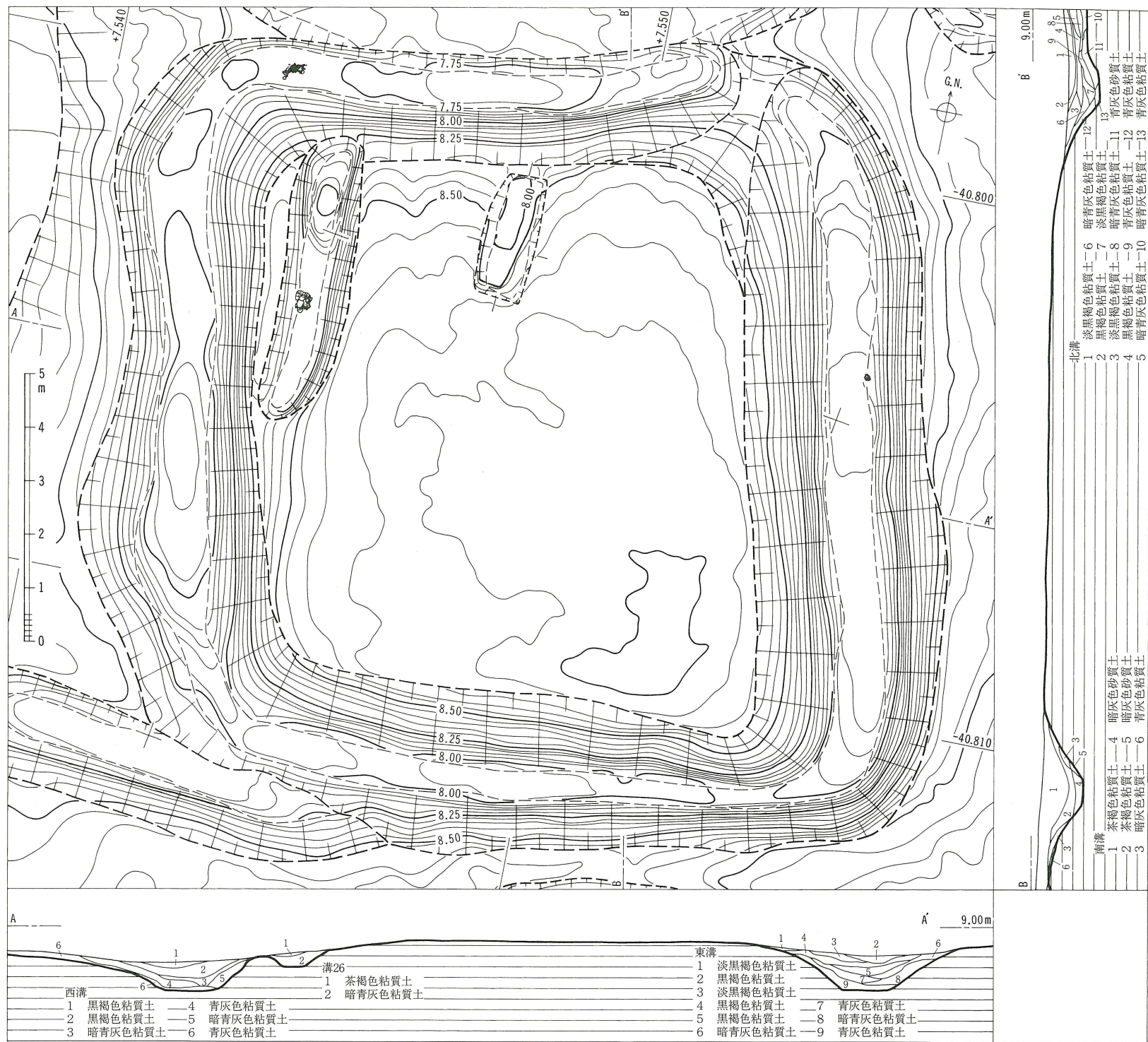
遺物は、北溝の東部および東溝から 2 個の供献土器が出土した。

方形周溝墓 16 (図版第 50、第 62 図) 墓域中央部 (16D・E、17D 区) にあって、方形周溝墓 15・17 に西接する方形周溝墓である。大部分の方形周溝墓が、幹道に沿った軸方向をとるのに対し、本方形周溝墓のみ、斜め方向をとる。煩雑を省くため、ここでは住居域に近い北西から南東方向の溝を北溝として記述する。

南溝は、上端の長さ約 14.5 m、幅約 3.0 m、深さ約 0.8 m を、西溝は、上端の長さ 13 m 余り、同幅約 2.8 m、深さ約 0.6 m を測る。北東隅の陸橋部は、上端の幅約 0.5 m を測り、周溝で区画された内・外两部分より多少低く、幹道から周溝内部の台状部に続く形をなす。

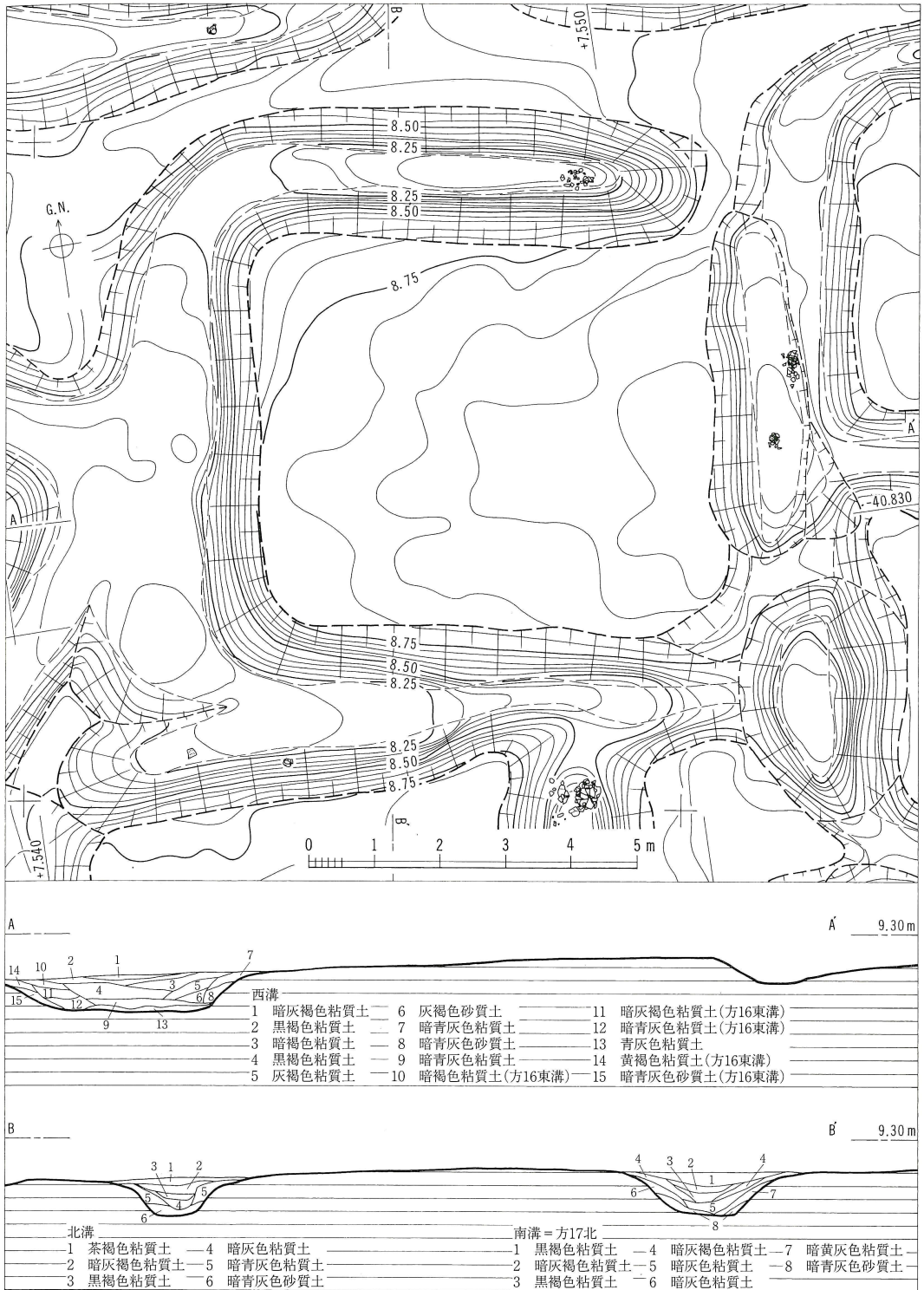
遺物は、北溝の西部から 1 個、東溝の中央部から 1 個の供献土器が出土したほか、周溝内から多数の土器が出土した。

方形周溝墓 14 の埋葬施設としては、台状部北部の中央に位置する土壇 1 基を検出した。土壇は、平面形が南北に長い長方形で、縦・横断面とも逆台形をなす。規模は、上端の長さ 2.4 m、同幅 1.05 m、深さ 0.7 m、下端の長さ 2.25 m、同幅 0.7 m を測る。土壇底面は、北部が南部よりわずかに高い。形状から木棺を使用したと考えられる。墓壇内から骨片と供献土器が出土した。

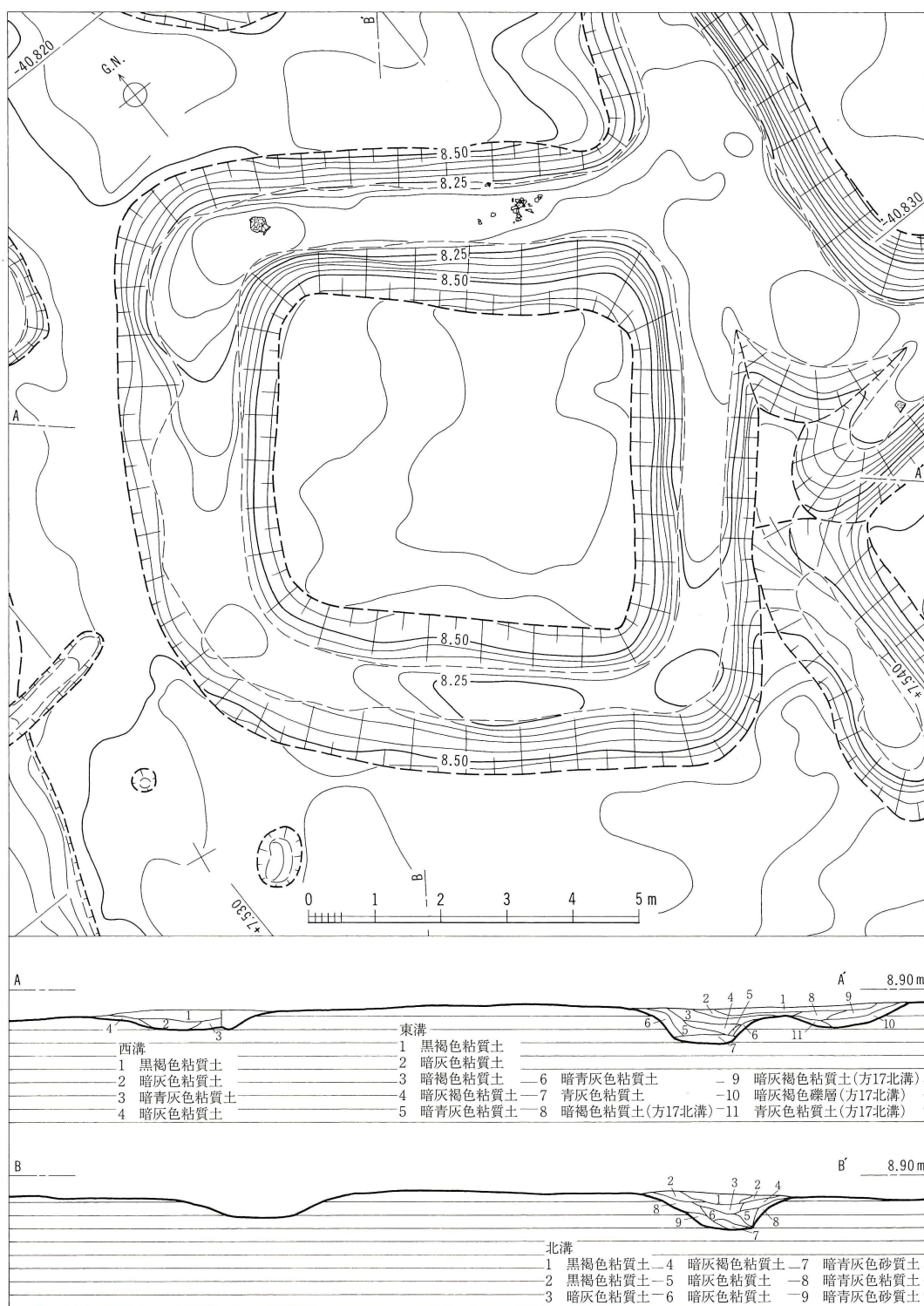


第60圖 方形周溝墓14実測図（縮尺 1/100）

第2節 遺構各説

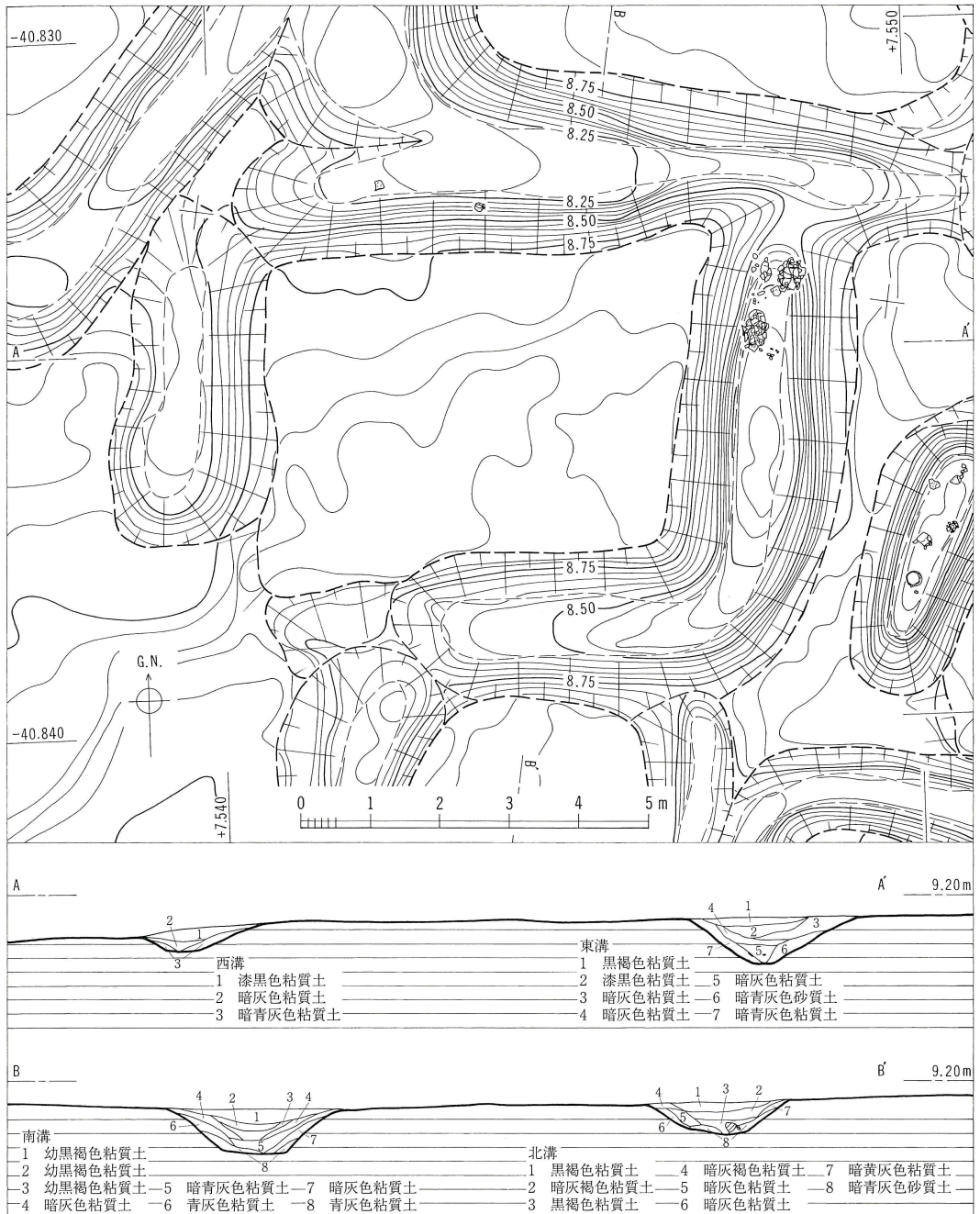


第61図 方形周溝墓15実測図(縮尺1/100)



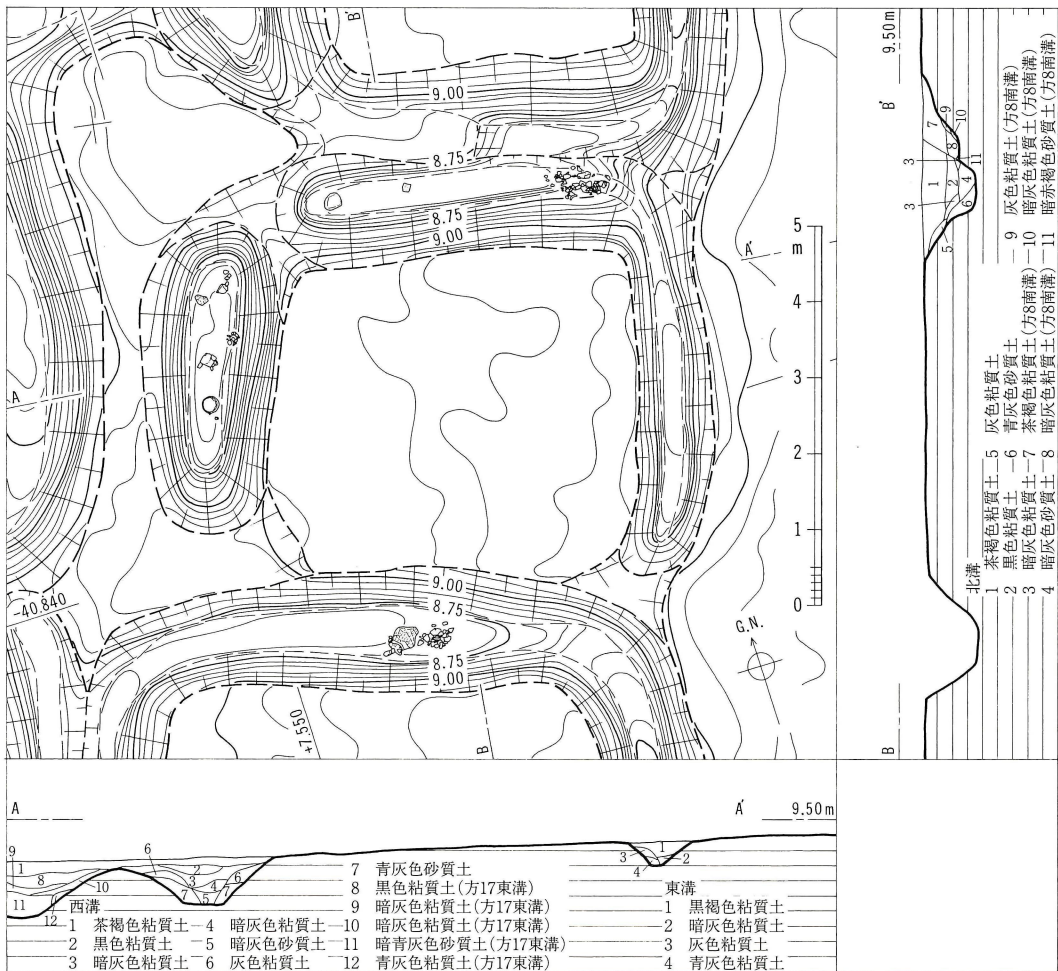
第 62 図 方形周溝墓 16 実測図 (縮尺 1/100)

第2節 遺構各説



第 63 図 方形周溝 17 実測図 (縮尺 1/100)

台状部の規模は、基底部で東西長約 6.7 m、南北長約 6.8 m を測る。台状部外周の溝は、四周を連続して巡り、北東隅は方形周溝 15 の西溝と重複する。北辺をなす北溝は、上端の長さ 8 m 余り、同幅 2.4 m 余り、深さ約 0.5 m を測る。東辺をなす東溝は、上端の長さ 8 m 余り、同幅約 1.9 m、

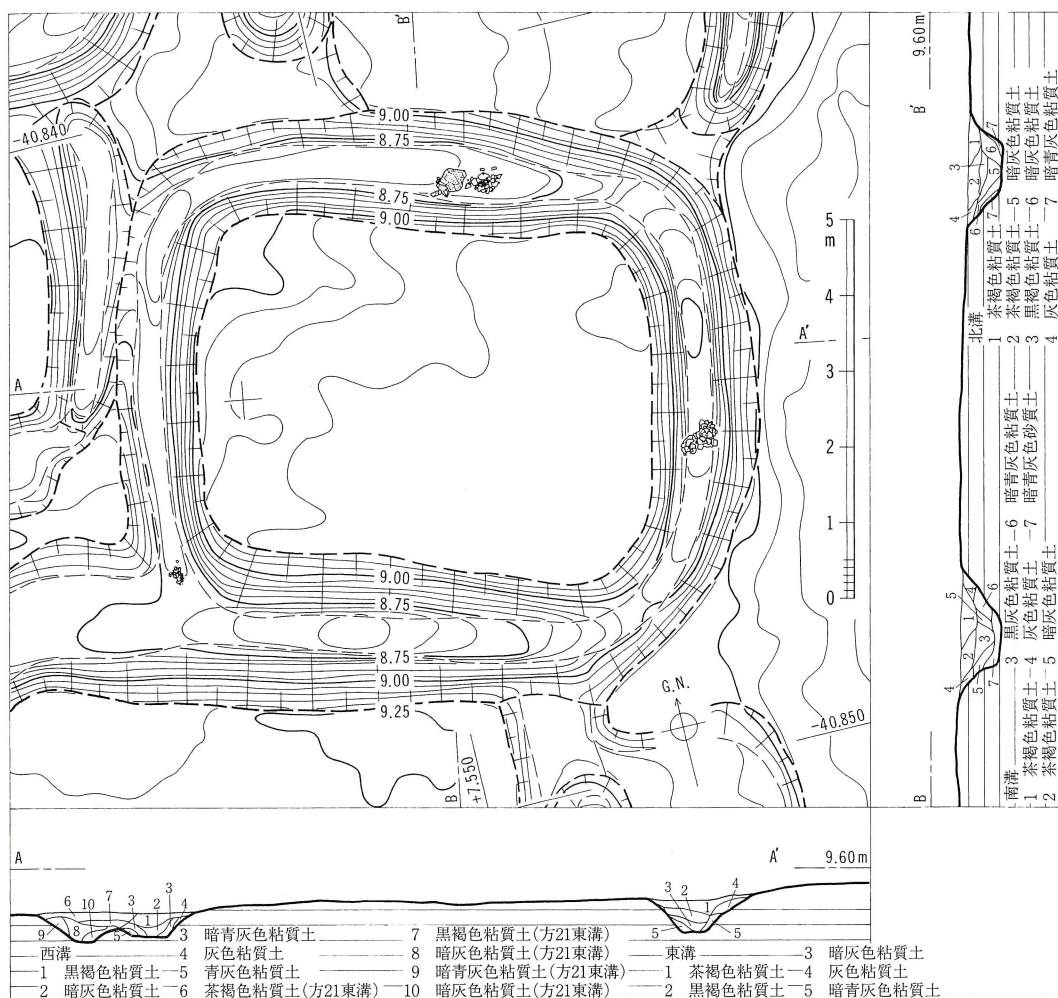


第 64 図 方形周溝墓 18 実測図 (縮尺 1/100)

深さ約 0.5 m を測る。南辺をなす南溝は、上端の長さ 8.5 m 余り、幅約 2.3 m、深さ約 0.3 m を測る。西辺をなす西溝は、上端の長さ 8.2 m 余り、同幅約 2.4 m、深さ約 0.3 m を測る。

遺物は、北溝より 2 個の供献土器が、東溝より土器 1 個が出土した。

方形周溝墓 17 (図版第 51、第 63 図) 墓域中央部 (16・17D・E 区) にあって、枝道 B を介して方形周溝墓 8・18 に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約 7.8 m、南北長約 5.8 m を測る。台状部外周の溝は、南西隅に陸橋部を残して巡る。ただし、北東隅では溝の接合部が浅く陸橋部をなし、北西隅では溝の接合部の境界をなす稜線を有する。北辺をなす北溝は、方形周溝墓 15 の南溝と重複する。上端の長さ 8 m 余り、同幅約 2 m、深さ約 0.6 m を測る。東辺をなす東溝は、逆 L 字状に屈曲して南辺をなす南溝と連続する。上端の東西長約 7.5 m、同南北長約 6.5 m、同幅約 2.4 m、深さ約 0.7 m を測る。西辺をなす西溝は、上端の長さ約 5 m、幅約 2.2 m、深さ約 0.4 m を測る。なお、南溝は、方形周溝墓 21 でもある。北東隅の陸橋部は、上端の幅



第65図 方形周溝墓19実測図(縮尺1/100)

約0.7mで、周溝で区画された内・外両部分よりも低く、枝道Bから周溝内部の台状部に続く形をなす。南西隅の陸橋部は、上端の幅約1.1mを測り、周溝で区画された内・外両部分とも高さが変わらず、周溝内の台状部からそのまま外部へ続く形をなす。

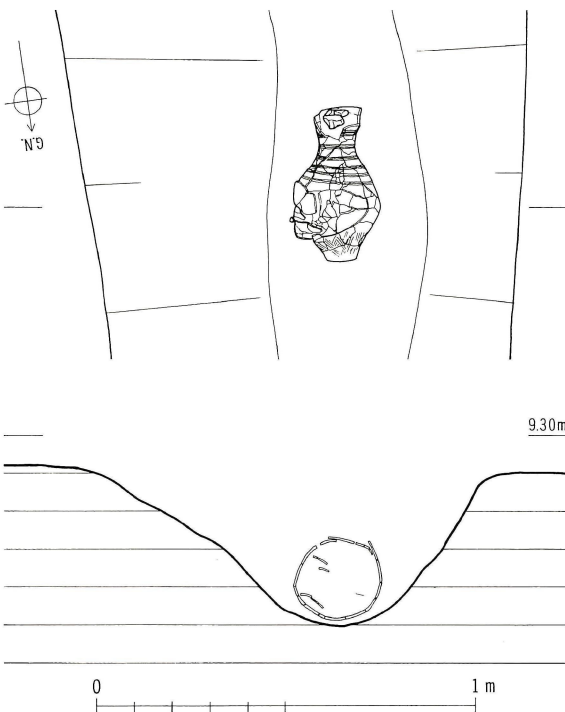
遺物は、東溝の北部より4個の供献土器が出土したほか、周溝から多数の土器が出土した。

方形周溝墓18(図版第52、第64図) 墓域中央部(17F区)にあって、幹道に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約5.9m、南北長約5.5mを測る。台状部外周の溝は、北西・南東・南西の三方隅に陸橋部を残して巡る。北辺をなす北溝は、既述のように、方形周溝墓8の南溝と溝底を異にして重複し、逆L字状に屈曲して東辺をなす東溝と連続する形をなす。北溝は、上端の長さ4.8m余り、同幅1.5m余り、深さ約0.7mを測る。東溝は、上端の長さ5m余り、同幅約1m、深さ約0.3mを測る。南辺をなす南溝は、方形周溝墓19の北溝でもある。上

端の長さ約 7.6 m、同幅約 1.6 m、深さ約 0.5 mを測る。西辺をなす西溝は、上端の長さ約 4.1 m、同幅約 1.8 m、深さ約 0.6 mを測る。南東隅の陸橋部は、上端の幅約 0.5 mで、周溝で区画された内・外両部分よりもわずかに低いが、幹道からそのまま周溝内部の台状部に続く形をなす。また、南西隅の陸橋部は、上端の幅約 0.8 mで、周溝内部の台状部からやや下り勾配で外部の枝道 B に続く形をなす。また、北西隅の陸橋部は、上端の幅約 0.3 mで、周溝で区画された内・外両部分よりもわずかに低い、枝道 B から上り勾配で周溝内部の台状部に続く形をなす。遺物は、北溝から 1 個、西溝から 2 個の供献土器が出土した。

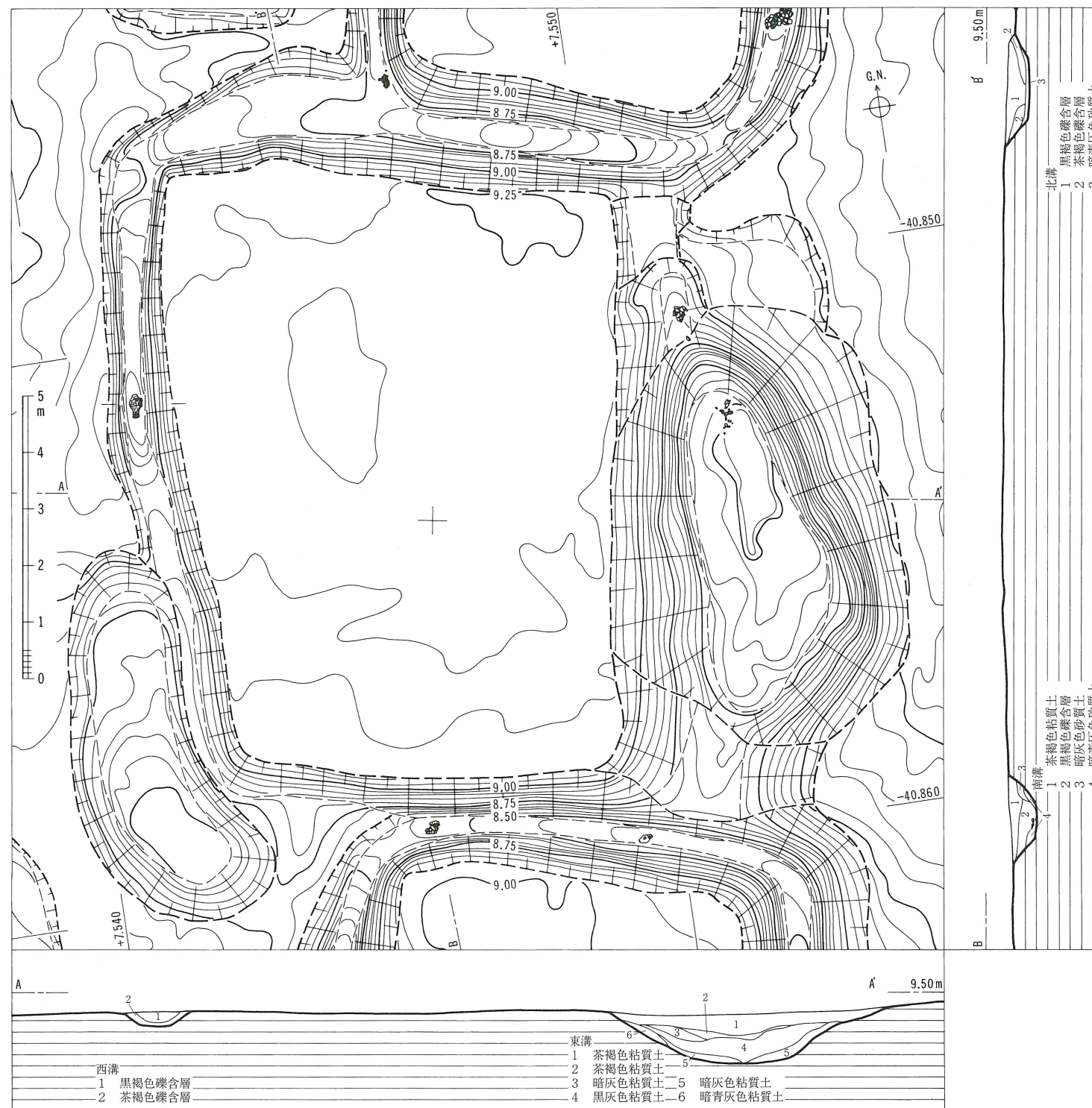
方形周溝墓 19 (図版第 53、第 65 図) 墓域南部 (17・18E・F 区) にあって、幹道に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約 7.0 m、南北長約 5.7 mを測る。台状部外周の溝は、四周を連続して巡る。北辺をなす北溝は、既述のように方形周溝墓 18 の南溝でもあり、上端の長さ約 7.6 m、同幅約 1.6 m、深さ約 0.5 mを測る。東辺をなす東溝は、上端の長さ 6 m 余り、同幅約 1.4 m、深さ約 0.4 mを測る。南辺をなす南溝は、方形周溝墓 20 の北溝でもある。上端の長さ 10.5 m 余り、同幅約 2.0 m、深さ約 0.5 mを測る。西辺をなす西溝は、北部で方形周溝墓 21 の東溝と溝底を異にして重複する。上端の長さ 6 m 余り、同幅約 1.1 m、深さ約 0.3 mを測る。遺物は、北溝中央部から 2 個、東溝中央部および西溝南部からそれぞれ 1 個の供献土器が出土した。

方形周溝墓 20 (図版第 54、第 66・67 図) 墓域南部 (18・19 E・F 区) にあって、幹道に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約 9.7 m、南北長約 12.0 mを測る。台

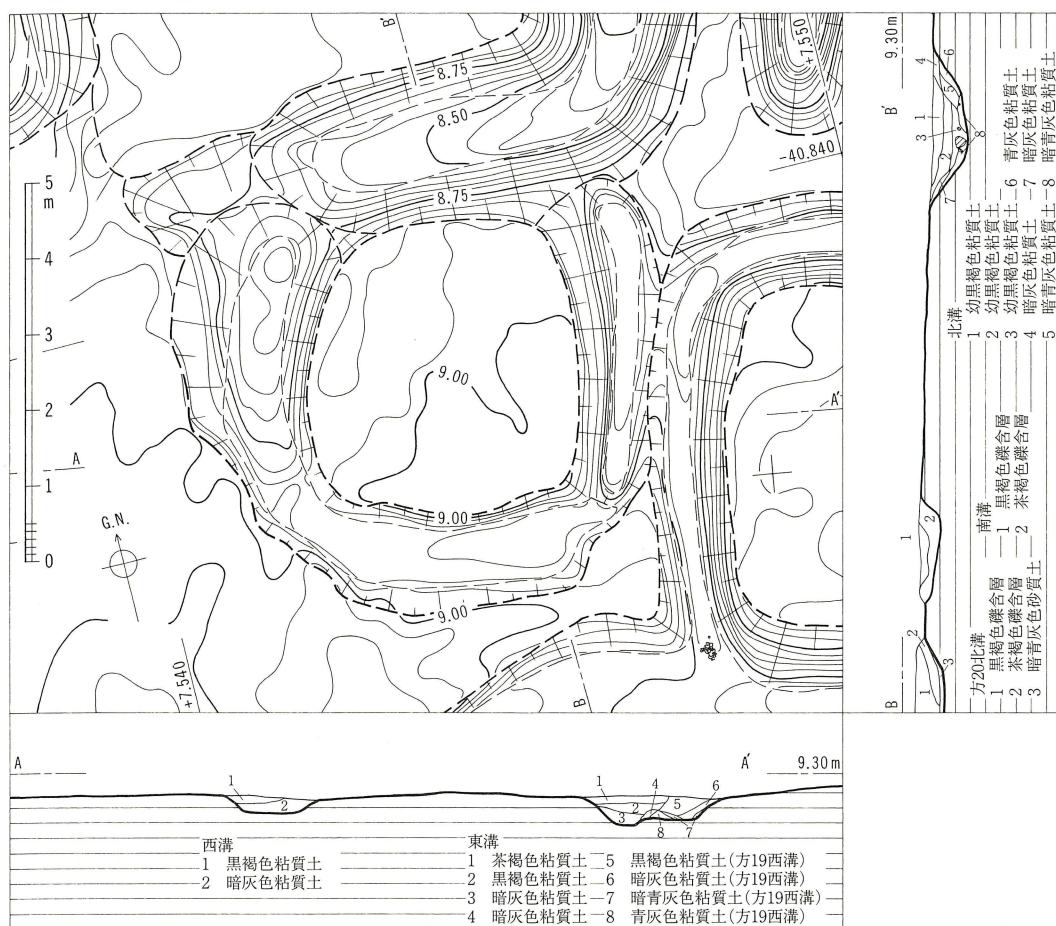


第 66 図 方形周溝墓 20 壺棺出土状況図 (縮尺 1/20)

状部外周の溝は、北東隅に陸橋部を残して巡る。ただし、南西部では溝外側の立ち上がり不明瞭となる。北辺をなす北溝は、既述のように東部が方形周溝墓 19 の南溝でもある。上端の長さ 10.5 m 余り、同幅約 2 m、深さ約 0.5 mを測る。東辺をなす東溝は、上端の長さ 10 m 余りで、中央部は上端の長さ約 7.7 m、同幅約 5 m、深さ約 0.9 mを測る土壙状に深くなる。南辺をなす南溝は、方形周溝墓 24 の北溝でもある。上端の長さ約 9 m、同幅約 1.8 m、深さ約 0.5 mを測る。西辺をなす西溝は、上端の長さ 12 m 余り、同幅約 1.3 m、深さ約 0.3 mを測るが、南部において溝に沿う形で上端の長さ約 6.8 m、幅 2 m 余り、深さ約 0.3 mを測る土壙状の落ち込みが存在する。これを外周溝とみなした場合、西溝の南北長は約



第67図 方形周溝墓 20 実測図 (縮尺 1/100)



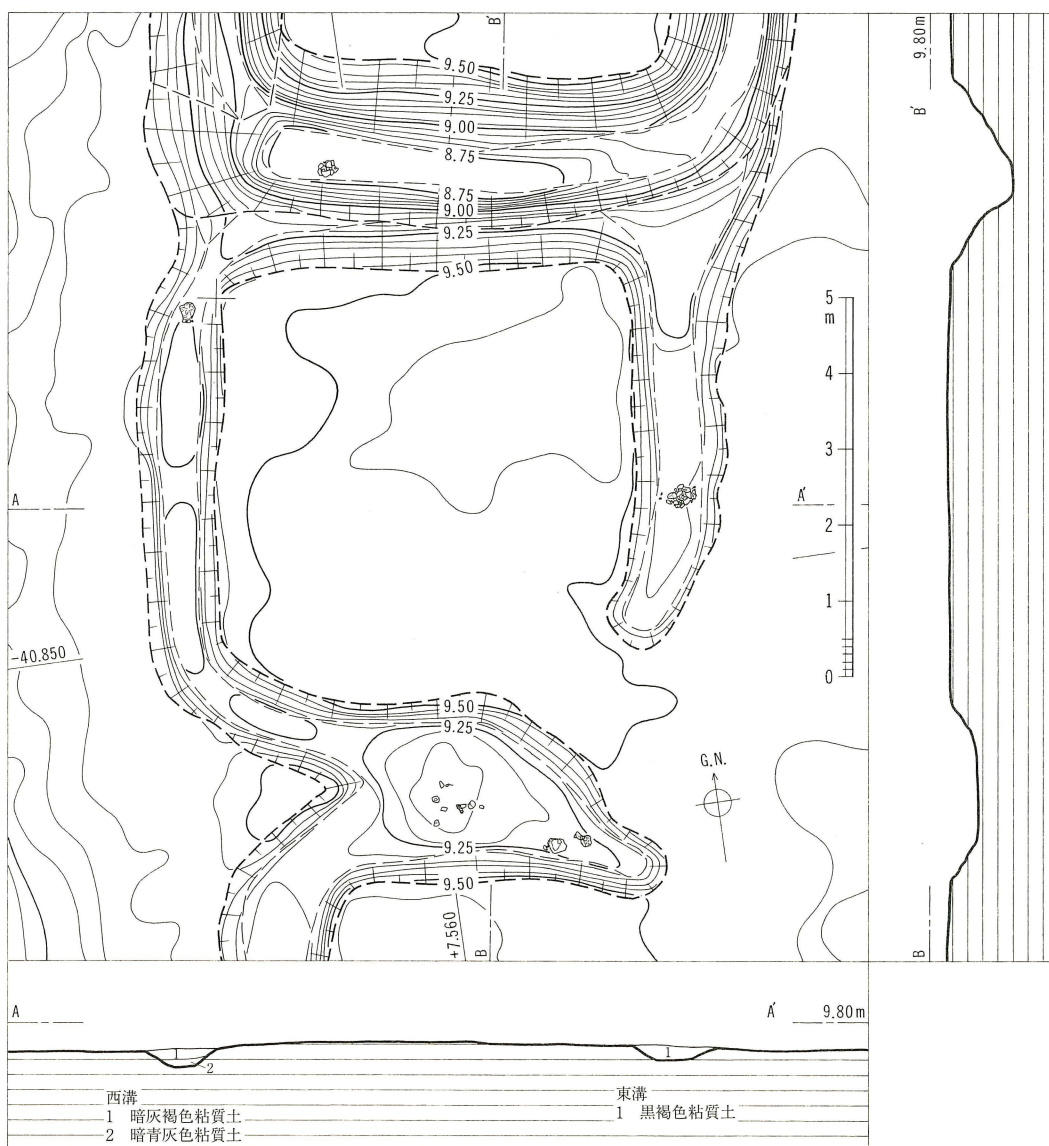
第 68 図 方形周溝墓 21 実測図 (縮尺 1/100)

14 m となる。北東隅の陸橋部は、上端の幅約 1.1 m で、周溝で区画された内・外両部分よりも低く、幹道から周溝内部の台状部に続く形をなす。

遺物は、東溝の北部より 2 個の供献土器が出土した。

方形周溝墓 20 の埋葬施設としては、西溝の中央南部において壺棺を 1 基検出した。壺棺は口縁部が南に、底部が北に位置し、溝底に横たえて、口縁部を 3 個の礫で閉塞した状態であった。

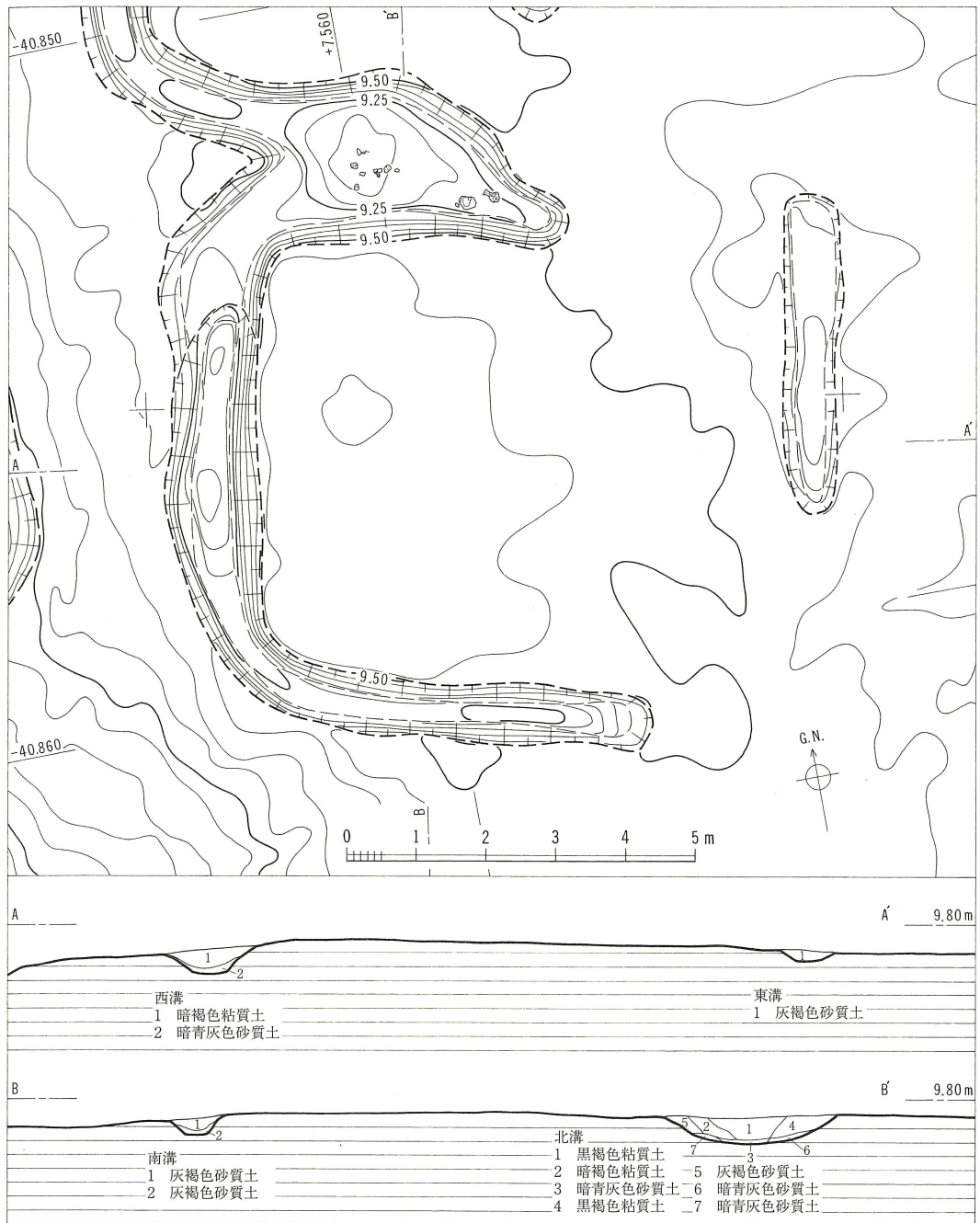
方形周溝墓 21 (図版第 55、第 68 図) 墓域南部 (17・18E 区) にあって、方形周溝墓 19 に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約 4.4 m、南北長約 4.8 m を測る。台状部外周の溝は、四周を連続して巡る。ただし、北東および北西両隅では溝の接合部の境界をなす稜線を有し、南西隅は緩やかに浅くなる。北辺をなす北溝は、既述のように方形周溝墓 17 の南溝でもあり、上端の長さ約 7.5 m、同幅約 2.1 m、深さ約 0.5 m を測る。東辺をなす東溝は、上端の長さ約 4.2 m、同幅約 1.2 m、深さ約 0.4 m を測る。南辺をなす南溝は、上端の長さ約 4.5 m、同幅約 1.2 m、深さ約 0.3 m を測る。西辺をなす西溝は、上端の長さ約 4.5 m、幅約 1.9 m、深さ約 0.4



第 69 図 方形周溝墓 22 実測図 (縮尺 1/100)

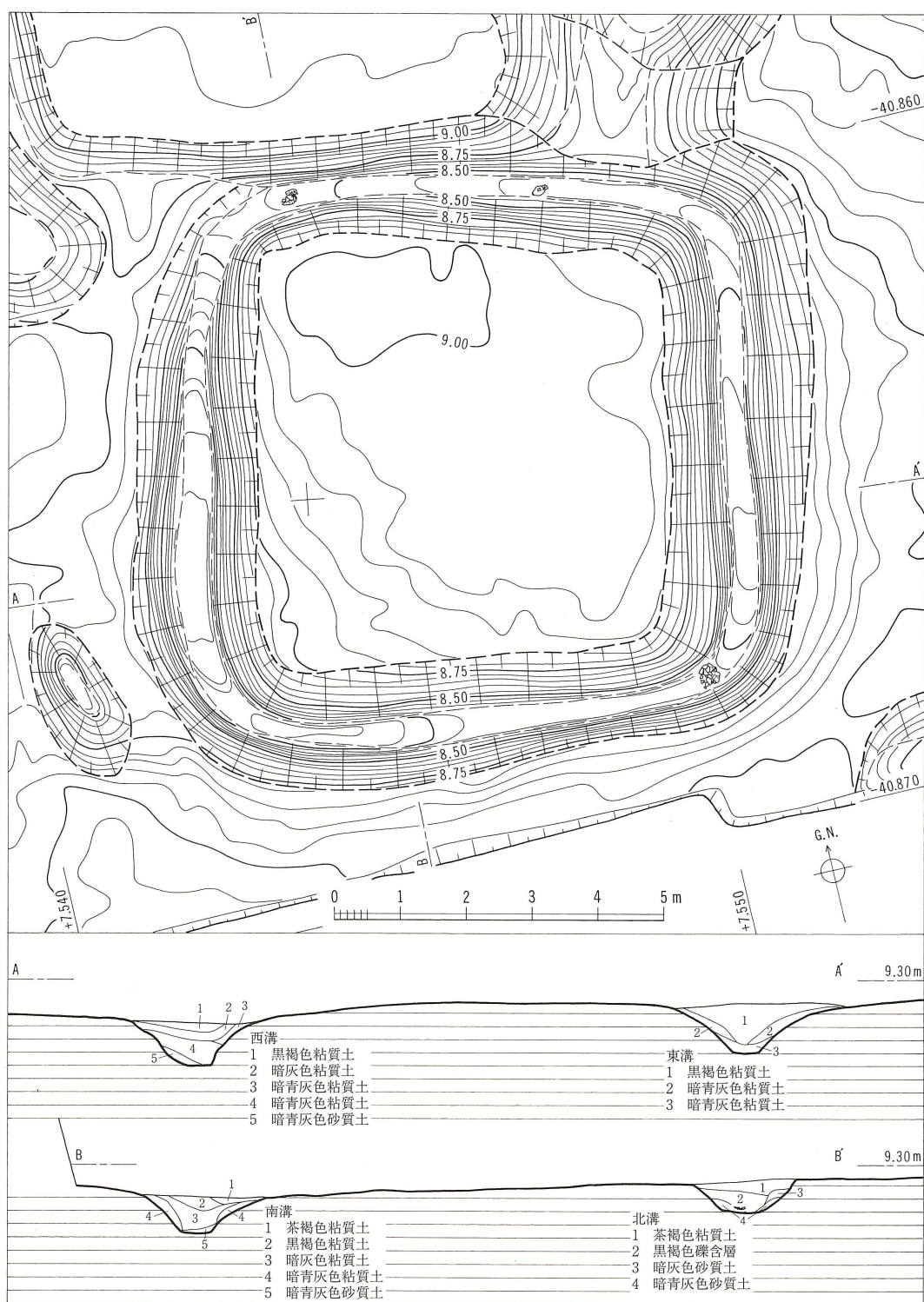
mを測る。北東隅の溝接合部が、枝道 B および同 C から周溝内部の台状部に続く陸橋部である。南西隅は、明確な上端を形成しないが、0.1 m 足らずと浅く、副次的な陸橋と考えられる。

方形周溝墓 22 (図版第 56、第 69 図) 墓域南部 (17・18F・G 区) にあって、幹道に東接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約 6.2 m、南北長約 6.6 m を測る。台状部外周の溝は、南東隅にのみ陸橋部を残して巡る。北辺をなす北溝は既述のように方形周溝墓 11 の南溝と重複し、上端の長さ 8 m 余り、同幅約 2.8 m、深さ約 0.9 m を測る。東辺をなす東溝は、北部で方形周溝墓 11 の東溝に連なり、上端の長さ 6 m 余り、同幅約 1.2 m、深さ約 0.2 m を測る。南

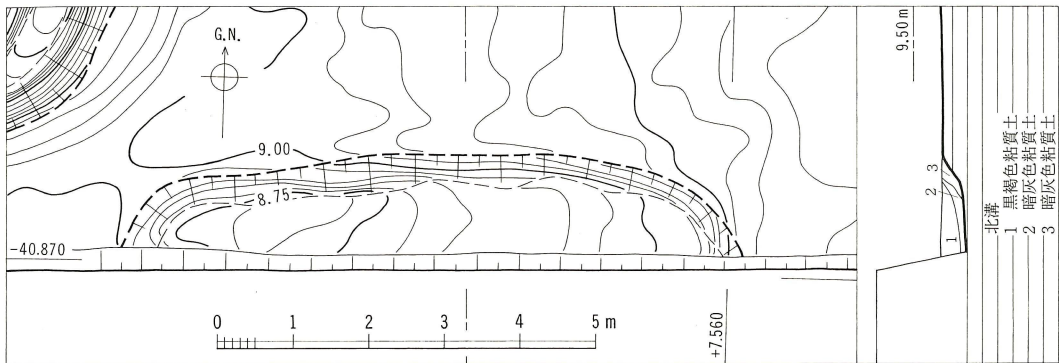


第70図 方形周溝墓23実測図(縮尺1/100)

辺をなす南溝は、方形周溝墓 23 の北溝と重複し、上端の長さ約 7.0 m、同幅約 2.5 m、深さ約 0.4 mを測る。西辺をなす西溝は、北端で方形周溝墓 11 の南溝と重複し、上端の長さ 6 m 余り、幅約 1.1 m、深さ約 0.2 mを測る。南東隅の陸橋部は、上端の幅約 1.5 mを測り、周溝で区画された内・外



第 71 図 方形周溝墓 24 実測図 (縮尺 1/100)



第72図 方形周溝墓25実測図(縮尺1/100)

両部分とも高さが変わらず、枝道Eから周溝内部の台状部に続く形をなす。

遺物は、東溝中央部から1個、西溝の北部から1個の供献土器が出土した。

方形周溝墓23(図版第57、第70図) 墓域南部(18・19G区)にあって、幹道に東接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約8.2m、南北長約7.0mを測る。台状部外周の溝は、北東・南東両隅に陸橋部を残して巡る。東辺をなす東溝は、上端の長さ約4.6m、同幅約0.8m、深さ約0.2mを測る。南辺をなす南溝は、逆L字状に屈曲して西辺をなす西溝に連続する形をなし、西溝は北部で浅くなり、同じく屈曲して北辺をなす北溝に連続する形をなす。南溝は、上端の長さ6m余り、同幅約0.8m、深さ約0.3mを測り、西溝は上端の長さ7m余り、同幅約1.4m、深さ約0.4mを測る。北辺をなす北溝は、方形周溝墓22の南溝と重複し、上端の長さ5m余り、幅約2.5m、深さ約0.4mを測る。北東隅の陸橋部は上端の幅約3.0mを、南西隅の陸橋部は同じく約3.5mを測り、ともに周溝で区画された内・外両部分とも高さが変わらず、枝道Eから周溝内部の台状部に続く形をなす。

遺物は、北溝中央部から東部にかけて2個の供献土器が出土した。

方形周溝墓24(図版第58、第71図) 墓域南部(19・20E・F区)にあって、幹道に西接する方形周溝墓である。台状部の規模は、基底部で東西長約8.0m、南北長約8.0mを測る。台状部外周の溝は、四周を連続して巡る。北辺をなす北溝は、既述のように方形周溝墓20の南溝でもあり、上端の長さ約9.0m、同幅約1.8m、深さ約0.5mを測る。東辺をなす東溝は、上端の長さ約8.5m、同幅約2.2m、深さ約0.7mを測る。南辺をなす南溝は、上端の長さ約8.7m、同幅約1.8m、深さ約0.6mを測る。西辺をなす西溝は、上端の長さ8.5m、同幅約1.8m、深さ約0.6mを測る。

遺物は、北溝から2個、南東隅の溝から1個の供献土器が出土した。

方形周溝墓25(図版第59、第72図) 墓域南部(20F・G区)にあって、幹道に東接する方形周溝墓である。現有農道に区切られた調査区域の南端部にあたり、北辺をなす北溝の一部を検出したにとどまる。北溝は、検出部分において上端の長さ約8.2m、深さ約0.3mを測る。

第4章 遺物

第1節 遺物序説

吉河遺跡で出土した遺物は、土器がコンテナバットにして約800箱以上、そのほかにも石器などが約1200点、木製品が約1000点を数え、膨大な量にのぼる。その大半は、調査区域北半部の住居域から出土しており、この状況が、墓域や周辺部の様相を表徴する結果ともなっている。

敦賀は現在の福井県、旧国では越前に含まれるが、吉河遺跡の土器は越前の同時期の糞置遺跡や今市岩畑遺跡、下屋敷遺跡とは全く異なる様相を示す。また旧国では隣となるが同じ若狭湾沿岸の土器とも様相が異なることが判明した。石器については調査段階から大型蛤刃石斧や石包丁、磨製石剣など種類・数量ともに越前のみならず、北陸の各遺跡と比較しても特異な量と内容であることが際立っている。

以下、次節にて弥生土器、石器、土製品・石製品、玉類ならびに玉作関連遺物、木製品と各出土遺物について説明していく。土器については竪穴住居、土壙、溝、方形周溝墓（供献土器の可能性ある、器形がうかがえ復元できた土器を中心に）、方形周溝墓の溝、包含層（復元できたものや、特徴的な破片を中心に）という出土地の順番で説明していく。

なお、出土した土器は、ほとんどが弥生土器であるが、縄文土器や須恵器、陶磁器なども若干は確認することができた。しかし、それらは非常に少なく、いずれも表土もしくは包含層からの出土で遺構に直接伴うものではなく、ここでは省略し、弥生土器のみについて呈示した。

また、当センターは平成16年の福井豪雨によって直接の被害を受け、収蔵庫に保管されていた本遺跡の土器を初めとする大多数の遺物も、直接に被害を受け、行方不明となったものや、損壊して復元することができなかったものもある。土器実測原図や遺構を含めたトレース図面、および原稿の一部までも例外ではなかった。さらに土器や石器などに書かれた遺物の出土地点を記した注記も、被災で消失したり、一部が不鮮明になったりしたものもあった。このような状況の下、大半の作業を再整理するなかで、竪穴住居や土壙・方形周溝墓などの遺構の時期を示すと思われる土器については、極力図化して呈示することとした。また溝や包含層出土については、その時期を特定しえないものも多いが、吉河遺跡、もしくは敦賀の特徴を示す土器を取上げることに努めた。なかには周辺のどこにも類例を求めることのできないような土器もいくつかあり、その解釈に困るような土器についても極力許される限り取上げることに留意した。

以上のように、本章は、過去に整理された成果に再整理した成果を継ぎ足す形で構成されている。そのため、土器の掲載が遺構の順番になっていない場合や、前後逆になったり、同じ遺構出土であっても別の図版になったりしたものもある。また、過去に成果発表した資料が記載されていない場合もある。きわめて遺憾であるが、これを補うものとして『吉河遺跡発掘調査概報』を参照していただきたい。

第2節 遺物各説

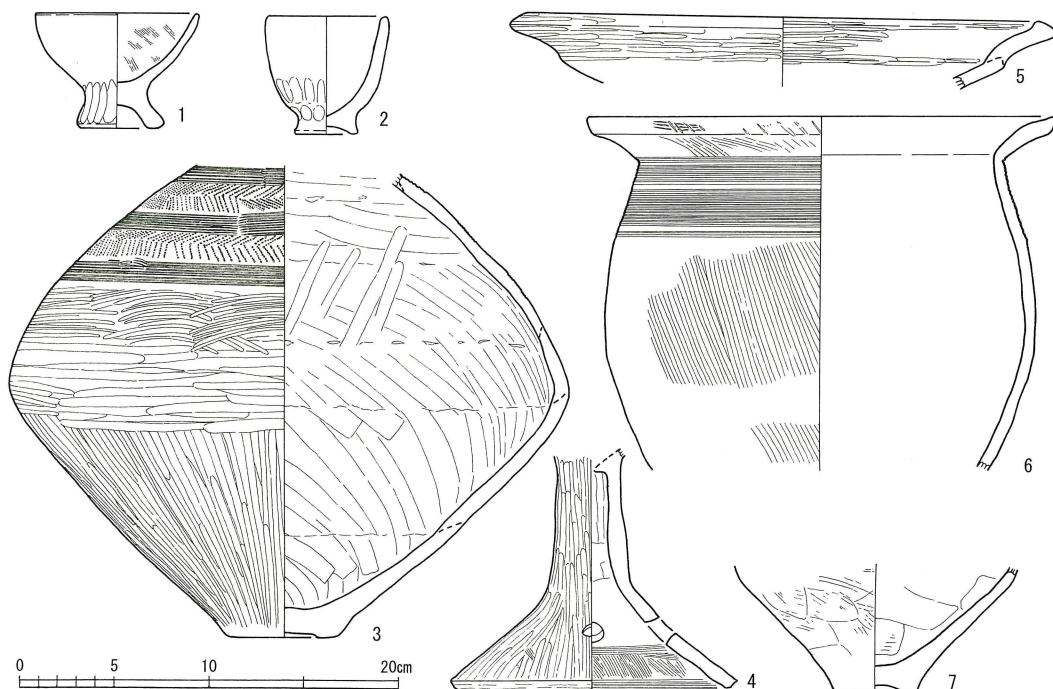
1 弥生土器 (図版第60～99、第73～118図)

(1) 竪穴住居・掘立柱建物出土の土器

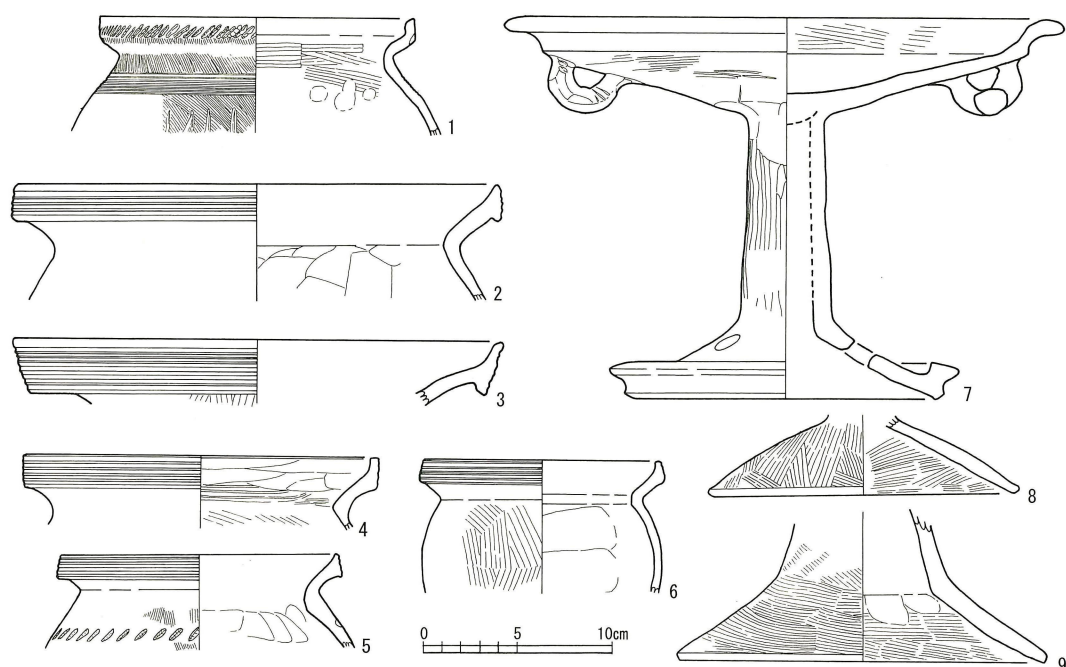
竪穴住居 1 図化できた土器は壺1点、高坏坏部1点、高坏脚部1点、小型の鉢2点の合計5点である。壺(第73図3)は頸部より上の口縁部を欠く。胴部上半に3段の櫛描直線文の間に櫛刺突列点文を施文する。胴部中ほどをヨコミガキ、下半をタテミガキとする。高坏坏部(第73図5)は口縁部のみで、屈曲して立上がり、口縁端部を肥厚させて面をつくる。内外面ともヨコミガキである。高坏脚部(第73図4)は[ハ]の字状に裾が開く。外面をタテミガキ、内面端部をタテハケののち、ヨコハケとする。先の高坏坏部の脚ではなく、有段口縁の鉢タイプのものであろう。小型の鉢にはやや厚手の脚台が付くもの(第73図1)と、底部をつまみ出して小さな脚台とするもの(第73図2)の2個体ある。いずれも胴部下半から脚台にかけて指押さえて成形・調整する。このほかにもある破片のほとんどは後期と考えられる。中期らしき破片も少なくないが、周辺からの混入であろう。ちなみに図化していないが、後期の破片には受口状口縁甕が目立つ。

竪穴住居 2 図化できた土器は甕1点と、壺または甕の底部1点の合計2点である。甕(第73図6)は口縁端部を厚くして端面をつくりヨコハケとし、頸部に櫛描直線文を数段重ねる。底部(第73図7)は指で押さえて上げ底とし、内外面ともケズリ調整とする。いずれも中期後半のものであろう。

竪穴住居 3 図化できた土器は壺1点、甕5点、高坏1点、高坏または器台脚部2点の合計9



第73図 竪穴住居1・2出土土器実測図(縮尺1/4)



第74図 竪穴住居3出土土器実測図（縮尺1/4）

点である。壺（第74図3）は口縁部のみで、器台の受け部である可能性もある。上下に拡張した口縁端に擬凹線文を施文する。甕のうち1点は、受口状口縁（第74図1）で口縁下半に櫛刺突を加える。胴部上半にタテハケののち櫛描直線文を施文する。胴部でも頸部付近はヨコハケである。ほかの甕4点はいわゆる有段口縁のもので、口縁帯を上下に拡張し擬凹線文を施文するものがあり、やや大型のもの（第74図2）と、もっとも多い中型のもの（第74図4）で、後者の肩部にはヘラ刺突列点文を施文する。胴部内面は弱いケズリ調整を横に行う。口縁帯を上へ立ち上げるものには中型（第74図4）と小型（第74図6）があり、中型のものは頸部付近にヨコハケを残す。小型のものは胴部の外面をタテハケ、内面を弱いケズリ調整を横に行う。高坏はほぼ全形が伺えるまで復元できた（第74図7）。棒状の脚から開いた坏部を屈曲させて立上げ、口縁部を大きく外反させる。口縁への立上り近くに、半円環状の把手を一对付ける。脚端部は大きく上へ折り返し、有段とする。坏部は内外面ともヨコミガキ、棒状の脚部はタテミガキとする。脚部のものはいずれも上の筒状部分の一部を欠くが、筒状の部分が細いもの（第74図8）と、太いもの（第74図9）の2種類がある。前者は外面をタテミガキ、内面をヨコハケとし、後者は内外面ともヨコハケとする。本住居出土でも覆土上層で出土したものに壺の口縁（第75図1）がある。受口状口縁で口縁帯に櫛刺突を加え、長く伸びた頸部にはタテミガキののち櫛描直線文を施文する。いずれの時期も後期で、有段口縁の甕も北陸的なものより丹後に類例に近いもので、近江系の受口状口縁甕とともに、本遺跡がある敦賀の地域色を如実に示す土器様相と考えられる。

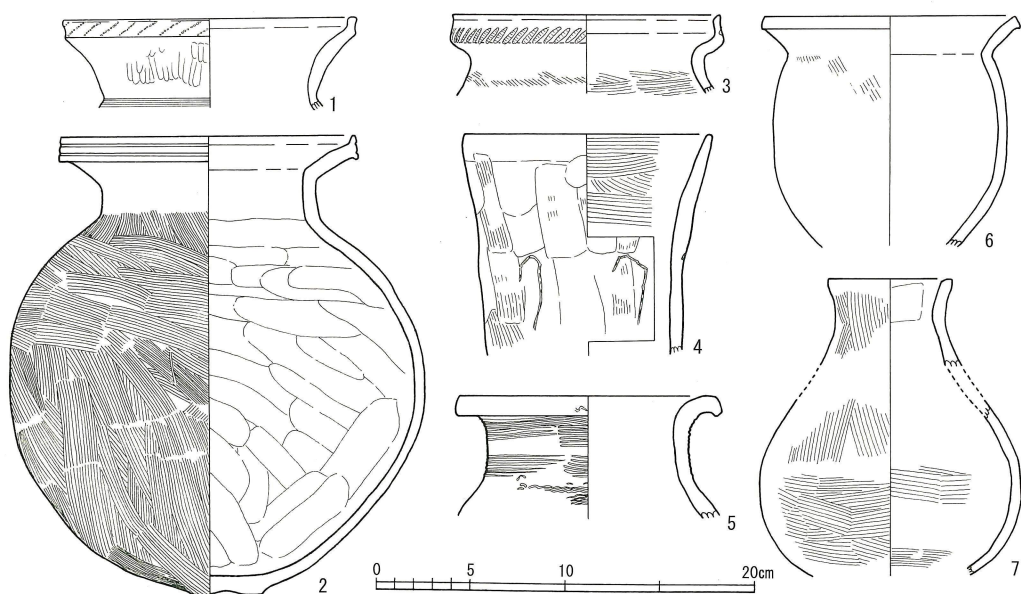
竪穴住居4 本住居から出土した土器は破片ばかりで、図化できたものは1点もない。数少な

い破片からも中期か後期かどちらかの判断がつかない。

竪穴住居5 図化できた土器は壺4点、甕2点の合計5点である。ほぼ完形に復元できた壺（第75図2）は、球形の胴部から太い頸部が立上り、やや開いた口縁となる。口縁端部を上下に拡張し、口縁帯に2条の沈線を施文する。底部は平底から指で押さえてやや上げ底とする。胴部上半はヨコハケ、下半はタテハケとし、内面は弱く横にケズリ調整とする。口縁部のみのものは受口状口縁のものと長頸壺の2点ある。受口状口縁のもの（第75図1）は立上がった口縁端面に櫛刺突列を加え、外面をタテミガキ、頸部に櫛描直線文を施文する。長頸壺（第75図4）は口縁端部を僅かにつまみ出して細くする。外面にタテハケののち、逆「J」字のヘラ描きを2ヶ所加える。壺のもう1点は明らかに中期のもの（第75図5）で、やや下へ開いた口縁から太い頸部に櫛描直線文を施文する。甕の口縁部のみのもの（第75図3）は受口状口縁で、口縁帯をやや内傾させ、端部に面をつくる。口縁帯に櫛刺突を加える。頸部外面にタテハケ、内面にヨコハケを残す。もう1点の甕（第75図6）は底部のみ欠く状態で図化できた。「く」の字に屈曲した頸部から短い口縁部が開き、端部に面をつくる。外面にタテハケを僅かに残す。

図化した土器の内、壺の1点のみが中期で、ほかの4点は後期であることから、中期の壺は周辺からの混入と考え、後期の竪穴住居であろう。

竪穴住居6 本住居から出土した土器で図化できたのは、壺（第75図7）が1点のみである。丸い胴部から口縁部への頸部は一部推定である。口縁は開き気味に端面となる。口縁部から胴部上半までタテハケ、胴部下半にヨコハケを行う。胴部下半の内面はヨコハケを行う。文様はないが、器形などから、この壺は中期でも中葉から後半と考えられる。



第75図 竪穴住居3・5・6出土土器実測図（縮尺1/4）

掘立柱建物 掘立柱建物の柱穴から出土した土器で、時期が明確にできるような破片はなく、図化できたものはない。ただし建物3と建物6については破片の胎土と色調から次のように判断されたので、その概要を記載する。

建物3の柱穴とおぼしき穴から出土した小片が10数片ほどある。そのいずれの破片にも中期の土器に特徴的な大きめの砂粒を含むものを確認できなく、胎土に加え、色調からも後期とおぼしき破片で占められる。建物6についても建物3と同じく、小片が10数片のみで、ほとんどに中期の土器に特徴的な大きめの砂粒を含むものを確認できなく、胎土に加え、色調からも後期とおぼしき破片で占められる。

(2) 土壇出土の土器

土壇から出土した土器については小片であっても、その時期を明確にできるものについては極力図化することとした。また特徴的な文様がないため、図化することのなかった土壇出土の土器についても破片を調べて、中期か後期かを判断したことは先の遺物序説で触れた。

なお、ここでは、土壇64のように明らかに方形周溝墓の埋葬施設であると考えられるもの以外の土壇については、遺構の項で土壇墓と判断したものも含めて、墓ではないと判断された土壇とともに、土壇としての遺構番号順に取上げて説明していく。

土壇1 甕の口縁部（第77図1）1点を図化した。外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする、いわゆる中期の「ハケ甕」である。

土壇5 壺の胴部片と底部片の2点を図化した。胴部片（第77図12）は櫛描直線文、ヘラ刺突列点文、櫛描波状文、さらに扇形文など多様な施文がある。底部片（第77図7）には木葉痕がある。いずれも中期の土器であろう。

土壇9 壺の口縁部と蓋の2点を図化した。壺（第77図2）はハケ調整の長頸壺であろう。蓋（第77図9）は小型で摘み部を欠く。後期の土器の可能性はある。

土壇11 鉢の口縁部（第79図1）1点を図化した。口縁部を上へ摘み上げて有段口縁とし、擬凹線を施文する。後期の土器である。

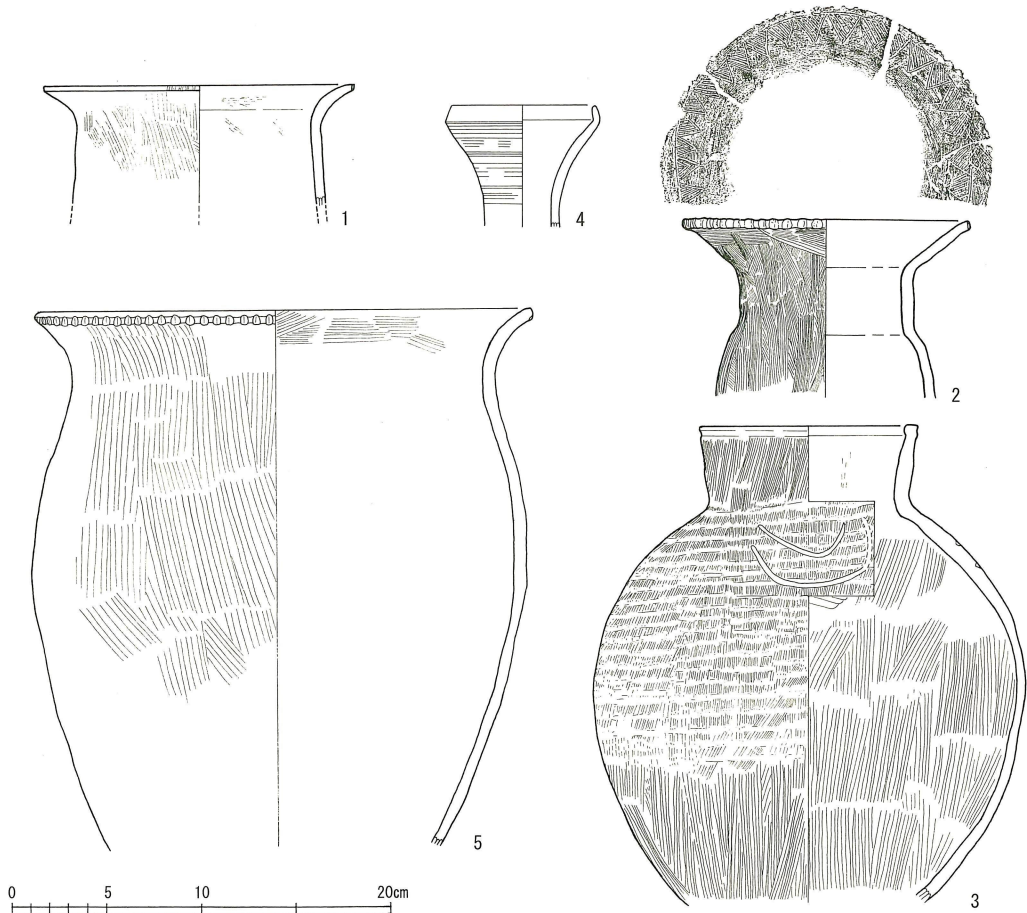
土壇12 壺の胴部片（第77図3）を1点図化した。櫛描直線文と櫛描波状文を交互に施文する。中期の土器である

土壇13 壺の口縁部（第77図17）を図化した。口縁端面にヘラ刻み目を加え、外面をタテハケ、内面に羽状櫛刺突列点文を施文し、瘤状突起を貼り付ける。中期の土器である。

土壇18 壺5点と甕4点の合計9点を図化した。底部を欠くがそのほかはほぼ全形が復元できた壺（第76図3）は、長胴に短い口縁がほぼ真直ぐに立上がる短頸壺である。口縁端部を押さえて、外面に1条の沈線を施文し、凹線文とする。外面全体をタテハケののち、胴部上半のタテハケを20条の不明瞭な凹線でナデ消し、弧状の沈線を2条ヘラで加える。胴部内面はタテハケとする。このほかに壺は破片で4点ある。沈線の上に羽状斜行短線文を施文するもの（第77図6）は頸部

片であろう。胴部上半の破片は、大振りの櫛描直線文（6本）の下に櫛描直線文（6本）を2帯重ねて施文するもの（第77図10）、ヘラ刺突列点文の下に縦の沈線を並べるもの（第77図11）、沈線の下にヘラの斜行沈線で鋸歯文を施文するもの（第77図16）の3点である。口縁端部にヘラ刺突を加える甕（第76図2）は、外面をタテハケとする「ハケ甕」であるが、頸部が長くなり、多くある甕とは器形が大きく異なる。口縁内面にはヨコハケののちヘラで刻んだ山形文を連続させ、口縁内面を飾る。この装飾があることを考慮すると、ハケ調整の壺と呼ぶほうがよいのかもしれない。このほかに甕の口縁部片が3点あり、いずれも外面をタテハケ、内面をヨコハケ、もしくはヨコハケののち波状文とする。口縁部をヨコハケで幅広とし摘み上げたもの（第77図13）、口縁内面の波状文ののちV字に櫛刺突を加え山形文とするもの（第77図14）、口縁端部にヘラ刻み目を加えるもの（第77図15）など、単純に「ハケ甕」として一括はできない。器形がうかがえるものから判断すると、中期後葉の土器であろう。

土壙 19 壺の口縁部（第77図18）を1点図化した。口縁部にヘラの刻み目を加え、外面をタテハケ、内面をヨコハケとする。中期の土器である。



第76図 土壙出土土器実測図1（縮尺1/4）

土壌 20 壺の口縁部（第77図5）1点を図化した。外面をタテハケ、内面をヨコハケとする。中期の土器であろう。

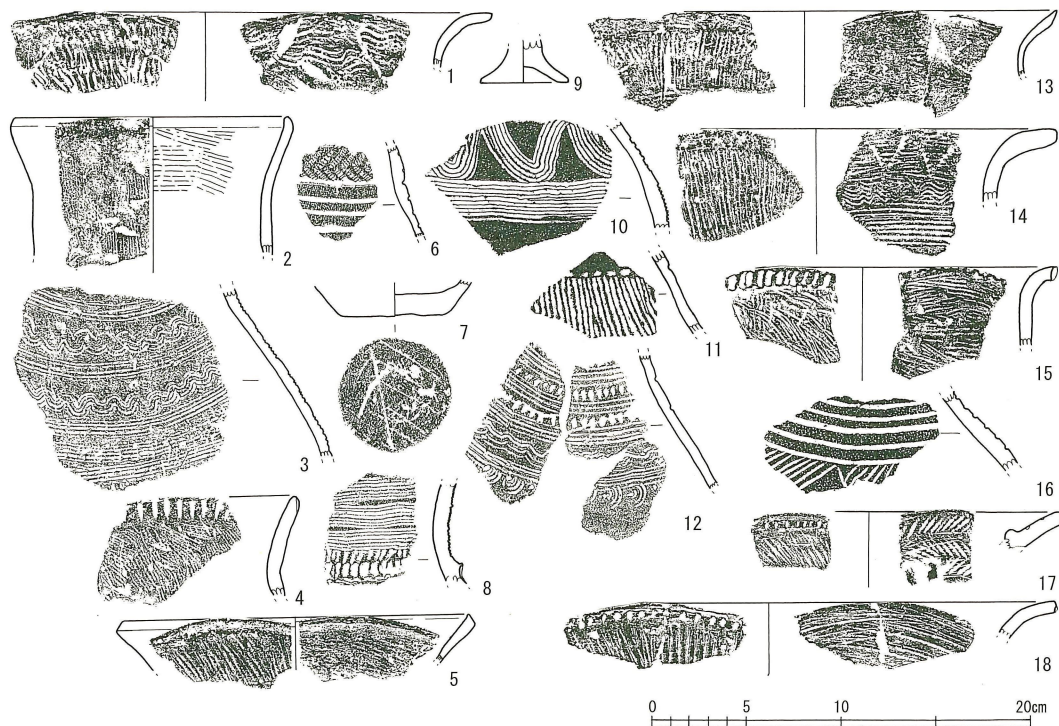
土壌 23 壺の口縁部1点と器台受け部口縁部2点の合計3点を図化した。壺は口縁が緩やかに外反するもの（第78図3）で、内外面をタテハケとする。器台は筒部を欠く口縁部のみで、口縁端部が上へ拡張するもの（第78図1）と、上下両側に拡張するもの（第78図2）の2種類ある。後者は壺の口縁部である可能性が高い。いずれも口縁端面に擬凹線文を施文する。いずれも後期の土器であろう。

土壌 24 甕の口縁部と鉢の口縁部の2点を図化した。甕（第78図5）は口縁部が内湾する。鉢（第78図4）は摘み上げて有段とした口縁端面に擬凹線文を施文する。いずれも後期の土器である。

土壌 26 壺の口縁部（第79図10）を1点図化した。口縁部が立上がる。後期の土器である。

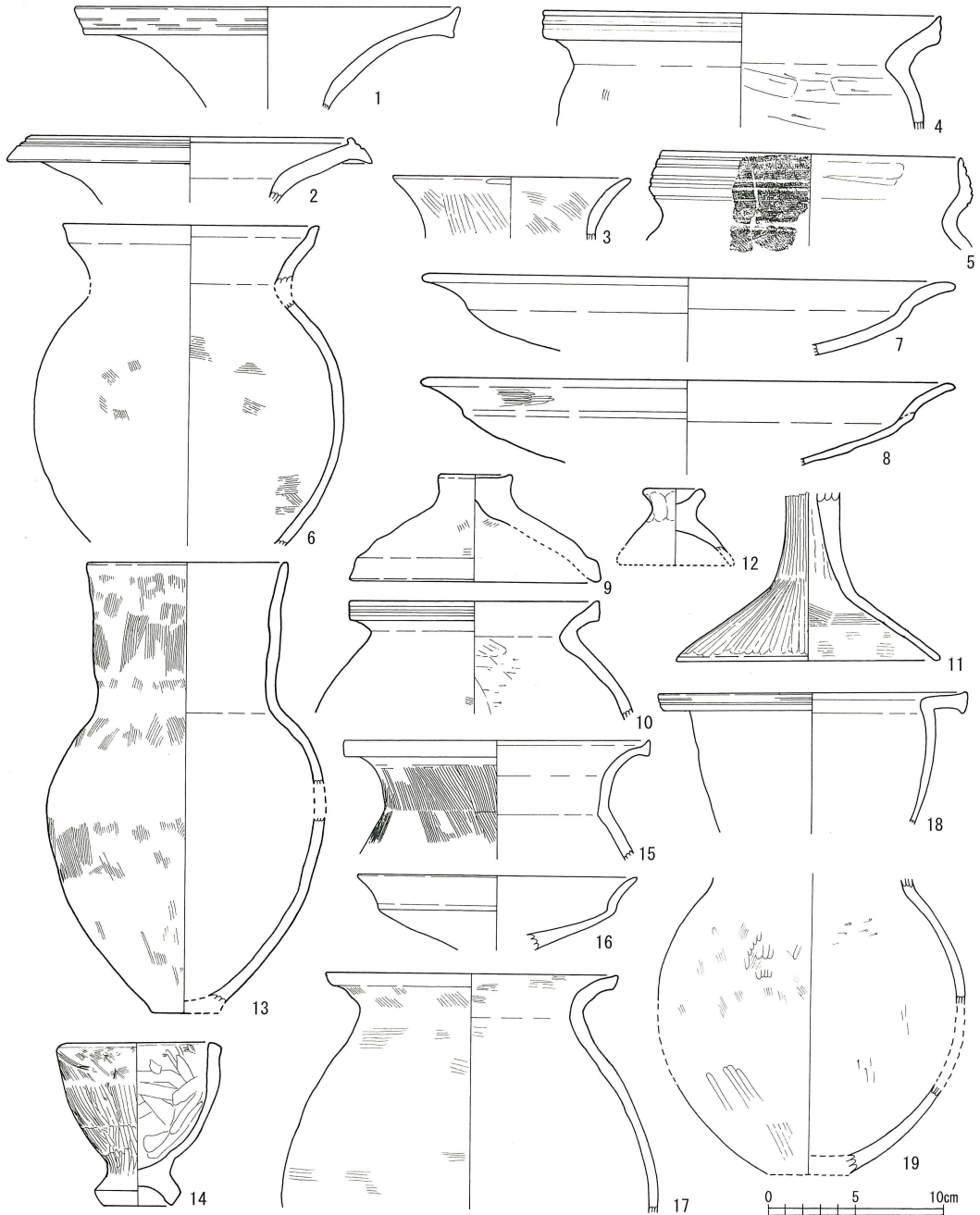
土壌 32 鉢（第78図18）を1点図化した。口縁が垂平に伸び、端面に2条の沈線を加えるものである。胴部が大きく張らないで、頸部からそのまますばまり、鉢としてはやや器高が高いものと考えられる。後期の土器である。

土壌 39 壺2点、甕1点、高坏3点、鉢1点、蓋1点の合計8点を図化した。ほぼ全形がわかるまでに復元できた壺（第78図6）の頸部は推定復元である。口縁端部を短く立上げ受口状口縁とし、長胴になると考えられる。壺の口縁部（第79図5）は端部を摘み上げて面をつくる。



第77図 土壌出土土器実測図2（縮尺1/4）

甕（第78図10）は口縁端部を摘み上げて有段とし、擬凹線を施文する。高坏坏部は口縁が外反するもの（第78図7・8）が2点あるが、外反の屈曲がやや異なるため別個体とした。高坏の脚部（第78図11）は棒状の筒部から「ハ」の字状に裾が開くもので外面タテミガキ、内面ヨコハケとする。孔の位置が脚端部に近く、丹後地方に類例が多いものである。鉢（第79図2）は有段



第78図 土壙出土土器実測図3（縮尺1/4）

口縁に2条の擬凹線を施文する。蓋は頂部がややへこむもの（第78図9）で、器壁が全体に厚く、上下が逆転して鉢とするべきかもしれない。いずれも後期の土器である。

土壌40 甕1点、高坏1点、鉢1点の合計3点を図化した。甕（第79図8）は無文の有段口縁である。高坏は坏部の口縁（第79図4）で、屈曲して開いた口縁の端部に面をつくる。鉢（第79図9）は擬凹線文のある有段口縁である。いずれも後期の土器である。

土壌49 壺3点と高坏か器台の脚1点を図化した。壺の頸部がやや伸びるもの（第78図15）は頸部および胴部外面をタテハケとする。ほかは擬凹線文のある有段口縁のもの（第79図6）と、口縁下端に櫛刺突を加える受口状口縁のもの（第79図7）である。高坏か器台いずれかの脚（第79図3）には低い位置に孔があり、端部に2条の沈線を巡らす。いずれも後期の土器である。

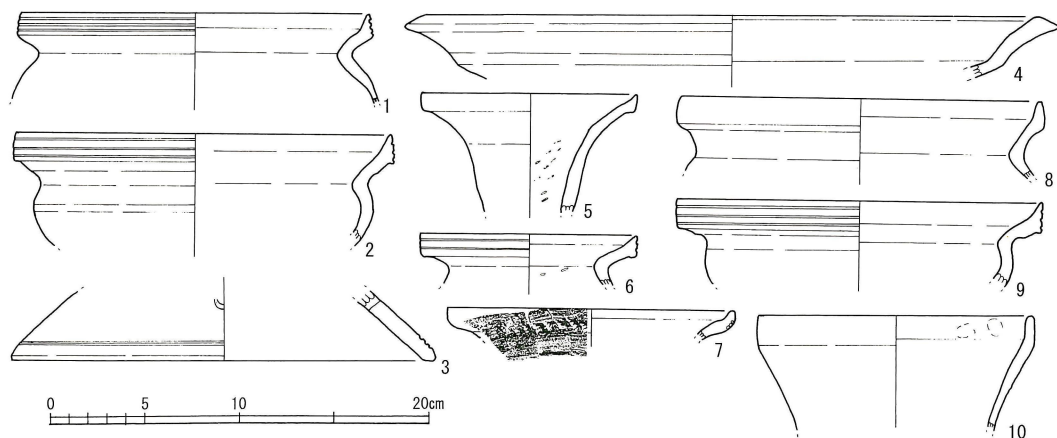
土壌56 ほぼ完形近くに復元できた長頸壺（第78図13）を1点図化した。外面をタテハケとする。後期の土器である。

土壌64 甕の口縁部（第81図6）を1点図化した。口縁端面に2個1対のヘラ刺突を加え、外面ハケとする。中期の土器である。

土壌65 甕の口縁部（第81図5）を1点図化した。口縁部をヨコハケで幅広とし摘み上げた甕である。

土壌70 高坏、もしくは何らかの脚台（第81図7）を1点図化した。裾の端部に面をつくる。中期の土器であろう。

土壌76 壺1点、甕3点、高坏1点、鉢2点の合計7点を図化した。壺（第80図4）は口縁部のみで、外面をタテハケ、内面をヨコハケののちユビオサエとする。完形に復元できた甕は2点あるが、いずれも口縁部に擬凹線文、胴部外面をタテハケ、内面の頸部をヨコケズリ、以下をタテケズリとするが、頸部が鋭く屈曲するもの（第80図1）は口径、器高ともに大きい。やや屈曲が弱いもの（第80図7）は口径、器高ともに小さく、有段口縁の立上りもはっきりしない。もう1点の甕（第80図2）も同じ調整の有段口縁であるが、肩部にヘラ刺突列点文を施文する。高坏（第



第79図 土壌出土土器実測図4（縮尺1/4）

80 図5)は脚下半の裾の部分を欠く。坏部口縁が大きく外反して、水平に端面をつくる。有段口縁の鉢(第80 図6)は、甕と同じように外面をタテハケ、内面をタテケズリとする。把手がつく鉢(第80 図3)は俗称「コーヒーカップ」と呼ばれるものである。外面をタテミガキののち、やや開いた口縁端部と胴部中央をヨコミガキ、内面をヨコナデとする。本遺構の土器は、敦賀地域の後期の様相を示す一括出土土器の基準資料であろう。

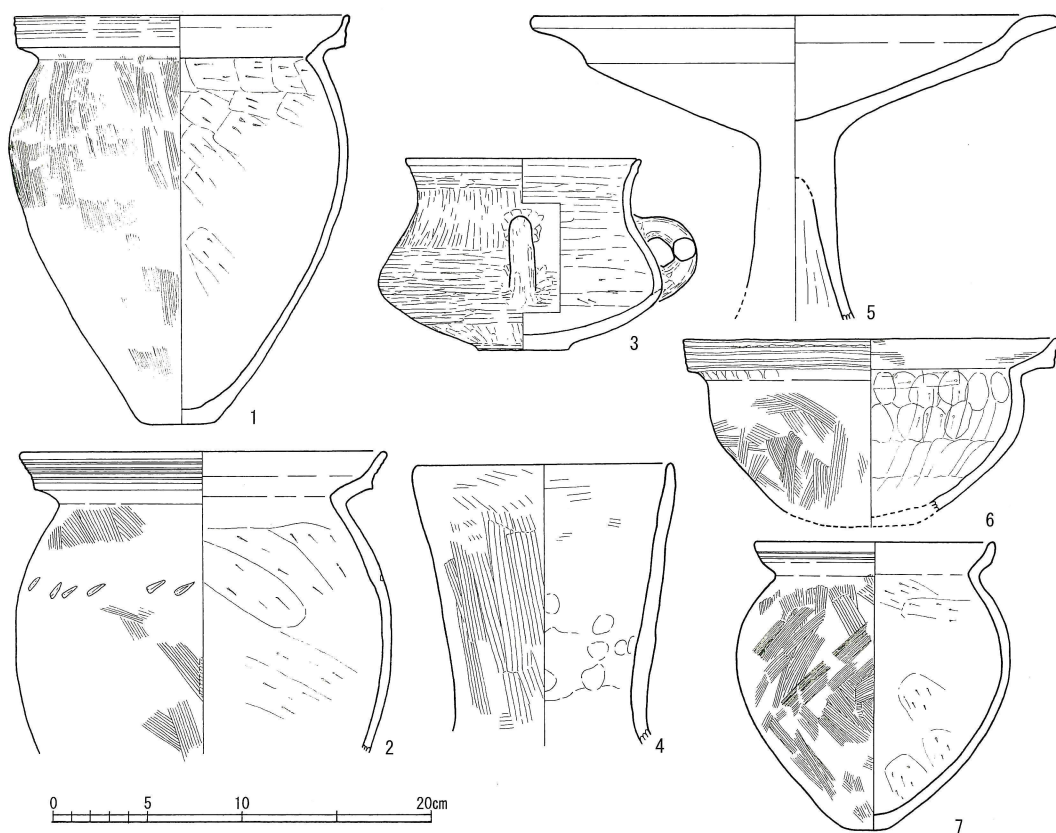
土壙 77 甕の胴部片(第81 図8)を1点図化した。胴部上半の外面に羽状櫛刺突列点文を、内側の口縁となる部分にも刺突列点文がある。中期の土器であろう。

土壙 79 甕の口縁部(第81 図4)を1点図化した。外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文を施文する。中期の土器である。

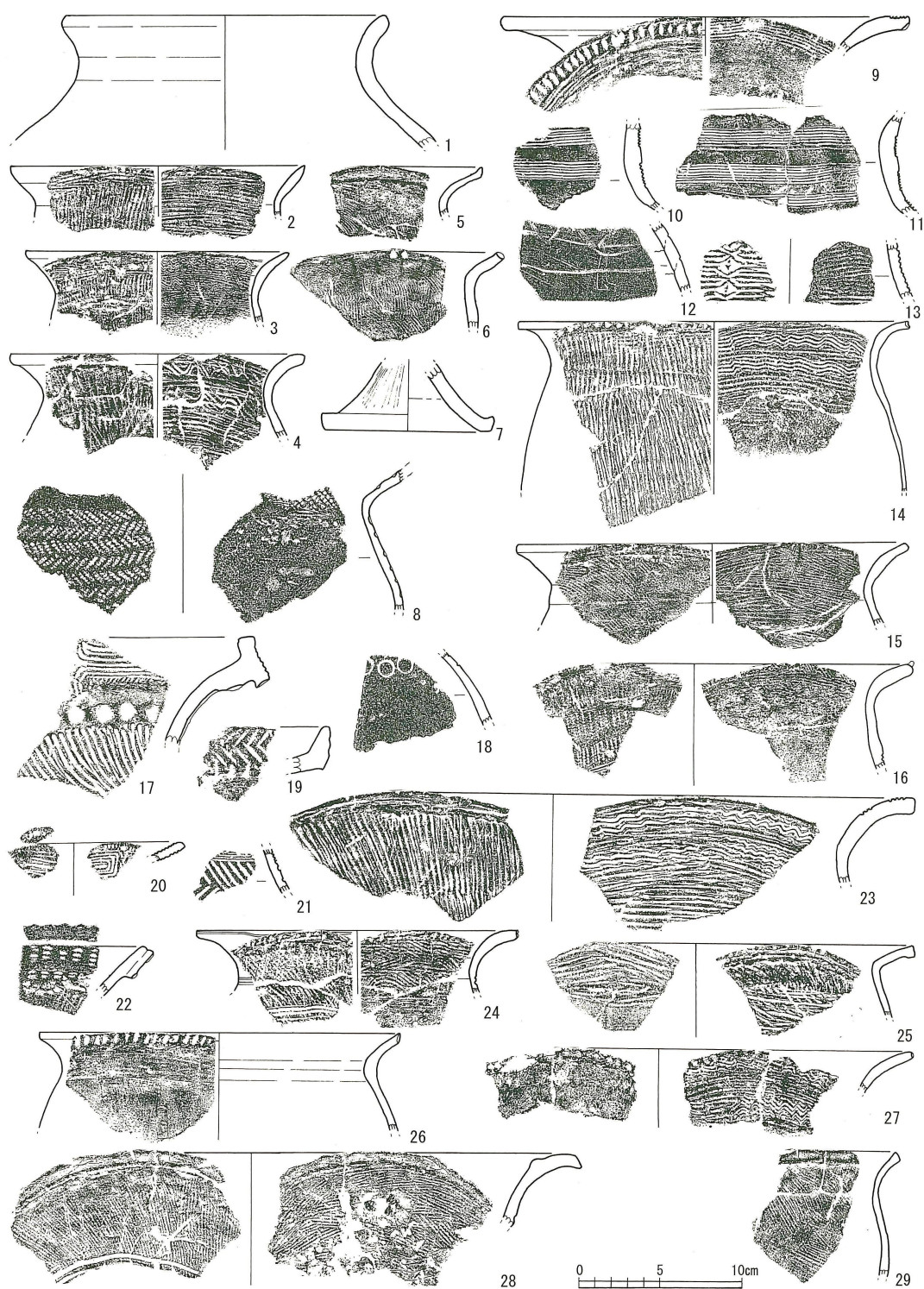
土壙 82 甕の口縁部(第81 図15)を1点図化した。口縁に端面をつくり、外面をタテハケ、内面をヨコハケとする。中期の土器である。

土壙 85 甕の口縁部(第83 図2)を1点図化した。有段口縁に擬凹線文を施文する。後期の土器である。

土壙 86 壺1点、甕2点の合計3点を図化した。壺は短い立上りの口縁部(第81 図1)で厚手



第80 図 土壙出土土器実測図5(縮尺 1/4)



第81図 土壙出土土器実測図6(縮尺1/4)

の器壁である。甕は口縁部をヨコハケで幅広とし摘み上げるが、内面がヨコハケのみのもの（第81図2）と、ヨコハケののち波状文を施文するもの（第81図3）の2種類がある。いずれも中期の土器であろう。

土壙 92 底部も口縁部も欠くが、大型の壺（第82図10）を1点図化した。ハケの条痕調整で胴部上半の直線文の上に2段の跳上げ文、下を横羽状の条痕調整とする。胎土や使用されている工具からも、東海地方の条痕文土器の在地での模倣品である。中期の土器である。

土壙 97 高坏の坏部（第78図16）を1点図化した。坏部口縁が外反するものであるが、通有のものより口径が二回り以上も小さい。後期の土器である。

土壙 99 壺2点と甕3点の合計5点を図化した。壺の口縁端部（第81図9）はヘラ刻み目を加え、その下をヨコハケ、口縁内面には櫛描直線文を巡らす。壺の太頸部のもの（第81図11）には櫛描直線文を巡らす。口縁部から胴部中ほどまである甕（第81図14）は、その破片の一部が土壙100と接合している。口縁端部にヘラ刺突を加え、外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文を施文する。もう1点の甕の口縁部（第82図8）は端部をヨコハケ、以下をタテハケ、口縁内面をヨコハケののち波状文を施文する。胴部片（第82図9）はタテハケののち同じ工具で直線文を施文する。いずれも中期の土器である。

土壙 100 壺頸部の2点を図化した。太頸の壺（第81図10）には櫛描直線文を施文する。胎土などから土壙99のものと同一であろう。もうひとつの頸部（第81図13）の外面には結束させたヘラの沈線が施文され、内面にはヨコハケとする。ちなみに土壙99でも述べたように、甕の破片が土壙100のものと接合している。いずれも中期の土器である。

土壙 104 壺（第81図12）を1点図化した。残された部分では施文が不明瞭な胴部片である。中期の土器であろう。

土壙 107 甕（第81図16）を1点図化した。胴部上半外面に櫛刺突列点文、内面をヨコハケとする。中期の土器である。

土壙 111 甕の口縁部（第83図7）を1点図化した。有段口縁に弱い櫛描の擬凹線文を施文する。後期の土器である。

土壙 113 壺（第81図17）を1点図化した。袋状口縁で口縁に上下に向かう沈線を施文し、立上がる口縁帯の下に連続指押圧を加え、タテ条痕とする。中期の土器である。

土壙 116 壺（第81図18）を1点図化した。胴部上半に円形の竹管文を施文する。ここでは中期としたが、後期の可能性もある。

土壙 128 壺と甕の2点図化した。壺（第82図15）は頸部から上の口縁部で端部を内湾させて、頸部まで全面に櫛描直線文を数段施文する。甕（第82図13）は口縁外面をタテハケののち、櫛描直線文を施文し、内面をヨコハケとする。いずれも中期の土器である。

土壙 138 壺と甕の2点を図化した。壺（第82図2）は細頸と考えられるが、頸部より上の口縁と底部を欠く。数段の櫛描直線文を施文する。甕（第82図3）は受口状口縁で、外面をタテハケ、

内面をヨコハケとする。いずれも中期の土器である。

土壙 140 甕（第81図23）を1点図化した。口縁端部をヨコハケ、外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文を施文する。中期の土器である。

土壙 141 甕を2点図化した。2点とも外面をタテハケののち櫛描直線文、内面をヨコハケののち波状文とするが、頸部に櫛描直線文があるもの（第81図24）と、直線文がなくて調整のハケが太いもの（第82図1）とあって別個体である。いずれも中期の土器である。

土壙 145 小型土器（第78図14）を1点図化した。台付鉢のミニチュアで、後期の土器であろう。

土壙 146 甕の口縁部（第81図25）を1点図化した。口縁端部にヘラ刻み目を加え、以下を外面タテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする。中期の土器である。

土壙 149 高坏の坏部（第83図5）を1点図化した。屈曲して立上がった口縁の端部をさらに外へ摘み出して面をつくる。坏の底部には内外面とも、タテミガキを残す。後期の土器である。

土壙 151 壺の胴部片（第83図6）を1点図化した。外面に櫛描直線文（6本）の間を連続して扇形文を施文する。後期の土器であろう。

土壙 153 壺2点と甕3点、いずれかの底部1点の合計6点を図化した。幅広の口縁帯の壺（第82図11）は端面上端にヘラ刻み目を加え、内外面をヨコハケとする。もうひとつの壺（第82図14）は口縁端部を内傾して摘み上げ、外面をヨコハケののち、刺突列点文を加え、内面はヨコハケとする。甕はいずれも外面をタテハケとするもので、口縁端部にヘラ刺突を加えるもの（第82図4）と、加えないで無文とするもの（第82図5）、さらに口縁部をヨコハケで幅広とし摘み上げて、内面にヨコハケののち波状文を加えたもの（第82図12）である。底部（第82図16）は上げ底として、外面タテハケとする。焼成後に穿孔する。いずれも中期の土器である。

土壙 154 甕（第78図17）を1点図化した。口縁端部に面をつくる。後期の土器である。

土壙 155 壺を4点図化した。口縁部の内外面に沈線を施文するもの（第81図20）と、貼付けした口縁部に刺突列点文を加えるもの（第81図22）の2点である。胴部上半片（第81図21）は沈線の下に羽状に沈線を施文する。胴部（第78図19）は外面をタテハケののちタテミガキ、内面をタテケズリとする。胴部の器形が伺える壺（第78図19）は後期であるが、破片のもの（第81図20・21・22）は中期の土器である。

土壙 158 甕（第81図27）を1点図化した。口縁部に刺突を加え、内面をヨコハケののち波状文とする。中期の土器である。

土壙 160 高坏の坏部と思われる口縁部（第83図1）を1点図化した。立上がる口縁帯の下半に刺突列点文を2段加える。後期の土器であろう。

土壙 180 甕の口縁部（第83図3）を1点図化した。受口状口縁の立上りに櫛刺突列点文を加え、頸部にはタテハケののち櫛描直線文を施文する。後期の土器である。

土壙 190 口縁部にヘラ刻み目を加える甕（第81図26）を1点図化した。外面をタテハケ、内